

純粹生産性批判

——最後の愚行の社会学

澤野雅樹
内藤 潔

一 聖なる愚挙を減ぼすもの

英語で言うところの「Natural History Museum」は以前、「博物館」と訳されていた。「Natural History」が博物学であり、博物学者（Naturalist）を名乗る人たちが世界中を放浪しながら収集したものがそこに収蔵されていたからである。すると「Museum」は単に「館」ということになる。「Museum of Modern Art」や「Modern Art Museum」を「近代美術館」と呼ぶのだから、それでいいような気がする。

ところが最近の流れは「Natural History Museum」を「自然史博物館」と呼ぶ傾向にある。どうにもその名の響きが耳に心地よくない。なるほど「Natural History」は自然史とも博物学とも訳せる。しかし一遍に両方の顔を並べてしまうのはいかなものか。例として適切か否かわからないが、さしずめ「mark」を「ドイツマ

ルク印」と訳すような居心地の悪さが残る。尤もらしい口実としてはダーウィン以前の「Natural History」を博物学、以降を自然史と訳し分ける習慣に起因するらしい。ふむふむと納得し、それらしい理由をつけて「Museum of Modern Art」を「近代芸術美術館」などと呼んでみたくなる。収まりがいいかどうかはわからない。同じ単語を異なる訳語で繰り返すという「謎」は、むしろ深まるばかりだ。いつそ同じ訳語で繰り返してみれば、なお違和感が増すのは疑いない——真っ暗な個室で「博物博物館」やら「自然史自然史館」などと呟いてみれば、不快な煩わしさはいよいよ頂点に達し、自身の正気を疑いたくもなるというものだ。

端から見れば、我々の言い分など「いちゃもん」以外の何ものでもあるまい。しかしながら、この「いちゃもん」にも相応の理由がないではない。つまり、あるのだ。博物学であれ自然史であれ、その分野に生きる人々の本質は色々なものを分類し、命名することにある。彼らは拾ってきた石ころやがらくた（失礼！）を専用の箱に入れ、然るべき札のある棚に収納する。博物館には彼らが何世代もの生涯を費やして発見し、丁寧に分け、命名したものがわんさと収蔵されている。

にもかかわらず「自然史博物館」の名称は、二つの異なる引き出しに足を突っ込んでいる。脚が二本あるからいいというものではない。分類と命名を生業とする者たちが自身とその棲息地について分類と命名の義務を怠っていることが問題なのだ。「Museum」を博物館が独り占めして、以降、美術館には使用させないというくらい意気込みがあるのならまだしも、たぶんそんなつもりもない。

カモノハシは哺乳類とされているが、卵を産むことで爬虫類の仲間に入れ、平べったい嘴でもって飛べない鳥の仲間にも入れるといった、めちゃくちゃな振る舞いをナチュラリストたちは恐らく許さないだろう。また、サ

メも種類によつては産卵せずに赤ちゃんを産むが、そのことを以て彼らをイルカやシャチのお友だちに数えることも許されないだろう。

もちろん、表札などどうでもいいと開き直すこともできる。実際、博物館を訪れる人々が見るものなど、そこに運び込まれた物のごく一部に過ぎない。ガラスケースに入れられ、恭しく展示されているのは、博物館が「どうだ、すごいだろ」と言わんばかりに見せびらかしているものでしかない。大概の展示物は、やたら大きいとか、派手な色をしているとか、あるいは無駄に可愛らしいといった、人目を惹く特徴を備えている。しかしながら、博物館の本領は、むしろ人々の関心を惹きつけることのない地味な草木の枝葉や、ただの石塊、または名前を知りたいとすら思わない凡庸な虫けらどもまで、およそ思いつく限りのものを片っ端からかき集め、厳密に整理した上で収蔵している点にある。

そして、博物館員というのは、娑婆で暮らす誰もが「そんなものは知らなくてもよい」と信じ、むしろ知っていることを薄気味悪いと感じるような代物に生涯を捧げる人たちのことなのだ。気色悪い動物と、気色悪い動物についてやたら詳しい生物学者との、いづれがより気色悪いのかはわからないが、その極北のような人物、レスリー・ベアストウについて、古生物学者のリチャード・フォーティは次のような紹介をしている。

一九三二年、レスリー・ベアストウが古生物研究部に配属されたとき、当時の部長は、スタッフが廊下を走りながら興奮気味に叫ぶのを聞いた。「ベアストウです！ ベアストウがここに来ます！」ベアストウは学部生として優秀な成績を収め、その後もケンブリッジ大学で研鑽を積み、並はずれた若さで同大学キング

ス・カレッジの特別研究員に任命された。そして難なく「大英博物館」に迎え入れられ、順調に終身在職権を得て、引退するまで論文を発表し続けたと思いきや、一つも書かなかった⁽¹⁾。

伝説の秀才は周囲の印象に反し、地位にあぐらをかくタイプの怠け者だったのだろうか。いや、右の文の直後にフォーティは「怠けていたわけではない」と付け加えるのを忘れなかった。仕事に手を抜くどころか、ベアストウは生涯、分類と命名に明け暮れ、集められる限りのものを集め、仕分けられる限りのものを仕分けていた。そうして、

ベアストウのコレクションはどんどん増えていった。彼はあらゆるものを整理・保存したと言われている。小包に入った標本が送られてくると、もちろん徹底的な同定作業を行ったが、包みを縛っていた紐まで保存し、長さ別に専用の箱に整理した。引退したのち、彼の部屋には、そのような箱がいくつも残され、それぞれ「紐、五〇―一〇〇センチ」などと書かれていた。ある箱にはこんなラベルが貼られていた。「短すぎて使えない紐」⁽²⁾。

恐らく世界は分類と命名を待っているものたちで満ち満ちている。ベアストウの一読する限り偏執のない変態的としか感じられない分類への執念は、彼自身の依怙地なこだわりや風変わりな気質のせいだけでなく、専門家としての責務に忠実なためでもあったろう。それが彼をして世界に対し、そう、彼を待っている世界の襞を分

け入って絶えず先に進むよう促していたのであろう。

だから、彼は書かなかったのではなく、書こうとしても書けなかった。知れば知るほどに世界の深みは暗く、自身の知について「まだまだ」と嘆き、浅学を恥じていたにちがいない。そこに伏在するのは恐らく道徳的な潔癖さのたぐいではない。自分の手で築く言語の体系と世界の秩序が樹立した体系とが逐一、寸分の狂いもなく一致していなければ何の意味もない世界観に暮らす者にとって、いよいよ書き始めるということは、何らかの対象群について、知の冒険が完了し、もはや何ひとつ加えるもののない境地に達したことを意味している。なるほど、そのような知の境地に人が達しうるのかどうかはわからない。あるいは最初から人の能力の及ぶ世界ではないところを目指してしまったのかもしれない。もちろん人の世は広いから、線虫に関しては神の域に達したと自惚れる研究者がいても不思議はないし、実際、大学の門を潜れば意味もなく偉そうにしている研究者に事欠かない。しかし、ベアストウはそのような自惚れに現を抜かすほど暇ではなかった。だから、ついに研究室を訪れることができなくなるその日まで、日々似たような作業に明け暮れ、それと意識することなく知の神的な次元を目指していたのである。

ベアストウは些か極端な例だったかもしれないが、極度に寡作な研究者は今でも若干はいるだろうし、昔はかなりいた。生来の怠け者もいたにはいただろうが、むしろおのれの無知を恥じ、不完全さに怯える碩学タイプの人に多いという印象がある。端から見れば知りすぎるほど知っていると思しき人物ほどおのれの知識不足に苛立ち、書くことに対する厳格な基準を些かも緩めようとしめない。

まあ、このような一見、不毛としか目に映らぬ研究者人生は、知る人ぞ知る大人物にこそ相応しい美しき人生なのだろうが、フォーティが『乾燥標本収蔵1号室』で紹介する人物たちは、そんな学者の鑑みたいなたちばかりではない。変人たちの肖像群に、何タイプかの鑑が紛れていたに過ぎない。だいたいが変なものに魅せられた者たちの巢窟である。大半は愛すべき肖像であるが、中には稀代の女たらしや世紀の嘘つきなども含まれている。近くで仕事をしている分には迷惑極まりないこともあったろうが、文字で追う限りではみな愉しい人たち（もしくは憎みきれない連中）である。

問題は、古生物学者にして地質学者でもあるフォーティが、どうして博物館の群像みたいな本を書いたのか、という点にある。ダーウィン以来の伝統と言うべきか、イギリスの生物学者には語り部としての能力に恵まれた人たちが少なくない。フォーティもその例に洩れず、「今度は同業者がテーマか」などと感心したりもしたが、しかし、生物学者が人間をサンプルに本を書いた理由に合点が行ったのは、以下のくだりを読んだときである。

一九九〇年、館長のニール・チャーマーズが博物館を再編成し、職員は公務員として国に雇われるのではなく、評議員会によって雇用されることになった。それは、評議員会が「余剰人員」を宣言できることを意味している。もつとありていに言えば、評議員会は職員をクビにできるようになったのだ。：〔中略〕：大英自然史博物館が、まだ政府官庁の遠く離れた一部だった時代に働きはじめ、解雇されるのは「たび重なる著しい道徳上の墮落」が見られた場合だけだと考えていた職員たちにとっては、かなりの衝撃だった。それまで、怠惰と不適切な言動はささいな欠点であって、致命的な罪ではないと考えられていた。ベアストウが

そうだったように、非生産的だからといって終身在職権があやうくなるようなことはなかった。しかし、ルールは根底から覆された。⁽³⁾

ベアストウは業績の点では振るわなかったが研究者としては最後まで一級品だった。しかし彼がどれほど優れた人物であり、どんなに偉大な科学者であろうとも、所詮は過去の人である。現代の研究機関にはベアストウのような非生産的な才能に空けておく余分なスペースはないし、収集と分類しか出来ない変人をわざわざ生かしておく余裕もない。

学術論文はかつて、新発見や謎の解明の報せだった。真に画期的な論文は、そこに並ぶ文字列を追うことによって、世界の姿を一変させてしまうほどの力を帯びていた。しかし、今や論文は飯の種であり、将来への切符であり、身分を獲得し維持するためのアリバイなのである。人はなぜ書くのか。真理がそこにあるからでは（もはや）ない。書かなければ、生きる糧を断たれてしまうからである。

学術論文の剽窃や捏造が後を絶たない理由は、そこにある。人は研究しているから書く。しかし、研究成果が比類のない光を放ちながら出現したから、それを世に問うべく決意して書くのではない。まともな研究者としての認知を希求するならば、何かをどこから無理やり捻り出してでも書くしかない。何であれ書き、世に問い（同業者のサークルに投函し）、そして互いに認め合うことが何とかその世界で生存してゆくための口実ないし手形になるからである。だから、今さら誰に認知を求めているのかを問うには及ばない——同業者であり、所属する研究機関であり、それを所轄する官庁の素人、行政官である。

現代の研究者は、言語の秩序と世界の秩序との幸福な一致を願い、またそれらの一体化を固く信じて、特異な信仰告白の言葉を紡ぐのではない。彼らが書くのは、まずまずの論文を物して、ほどほどの能力を、それを裏付ける書類によって人に認めさせるためだ。翻って同業者による能力の承認が主張の真正性を保証する仕組みになっているのである。さらに同業者団体の結束の堅さは、承認のサインが描く互酬性のサイクルによって定義されるだろう。

生々しい話になるが、簡単に言えば、同等の力量を有する者という意味の〈ピア〉の目をかい潜りさえすれば、承認を得ることに成功したことになる。私たちは長らく、昔ながらの幸福な一致（言葉と物との婚姻）と、この他者の承認（人と人との威信の交換）について、両者は同じものだと意図的に混同してきた。しかし、そんな幻想は長く続かない。他者の承認は、単に他者が承認したというだけのことであり、それによって語りの真正性は何ら保証されない。言い換えるなら、もはや言語の真正性を求める声は暗黙のうちに背後に退き、消え入るばかりになる一方、他者の承認が前景に躍り出て、それが誰にとっても急務になったのである。学生のレポートと同様、承認を勝ち取ることさえできれば、どんな技巧も許される時代になった。剽窃や捏造などの不正行為でさえも発覚を免れれば技巧の一部ということになる。

このような由々しき事態の背景を成すのは、世に蔓延る成果主義の猛威である。子どもたちの評価が学業成績によって決定されると同様、営業マンの能力は営業成績によって決定される。どちらにも予め計画された目標があり、テストの得点や売り上げ金額などは、目標に照らした達成度によって評価される。現代では、科学者たちの研究業績も営利企業と同様、一年刻みの決算によって評価されようとしている。

成果主義は二〇世紀後半に涼しい顔をして学問や芸術の世界に忍び込んだ。最初は新参者らしく相応に行儀よく振る舞っていたが、持ち前の傲岸さは二一世紀を迎える頃になると抑え難くなり、今や原理主義ばりの露骨な有り様だ。フォーティは大英自然史博物館に訪れた変化を次のように述べている。

科学者が自然史博物館の活動の中心にいた時代は終わった。すでにナイトとなっていたチャーマーズが二〇〇四年に引退すると、マイケル・デイクソンがあとを継いだ。その時点で、すでに、科学の第一線ではなく、行政分野ですつと過ごしてきた人物が館長に任命される素地ができていた。⁽⁴⁾

行政や企業を稼働させる論理が研究者の世界に土足で踏み込むとき、いったい職場に何が蔓延し、人々のあいだにどんな異変が生じるのか？

時を同じくして、重要な変革がいたるところで起きていた。大英自然史博物館は不動産の自由保有権をもつようになり、かの有名な建物の維持管理をゆだねられた。また、所属する科学者は、個々にリサーチカウシシルに研究助成金を申請することになった。わたしたちは自由市場で競合する一組織になったのだから当然だ。しかし、助成金獲得はとてもむずかしい。とりわけ二〇世紀末の一〇年間は大学との競争が激しくなったせいで、さらにむずかしくなった。状況は二一世紀になった今も、たいして変わっていない。しかも、博物館の研究計画はもはや国の基金には頼れなくなったので、ただ存続するためだけでも助成金はますます重

要になった。経営者側にとって助成金は歓迎だった。「間接経費」つまり、博物館のほかの部分にまわす費用をもたらずからだ。

：「中略」：企業文化がもちこまれ、古いセピア色の世界は追い払われた。それもほとんどの人に言われれば、遅すぎるくらいだった。

大英自然史博物館はテーマパークになりました！ さあ、いらっしやい！ いらっしやい！ 昔ながらの展示室が消えていくのを嘆いている暇はない。⁽⁵⁾

なるほど、わかりやすい世界が到来した。肘掛け椅子にもたれ、物憂げな表情を浮かべながら思索に耽る古の賢者の佇まいはすっかりお伽噺になってしまった。賢者の独り言を遠巻きに眺め、深遠な知の片鱗を何とか聞き漏らすまいとする面倒な時代は完全に過去の遺物となった。もちろん、昔ながらの呑気そうな研究者が本当に呑気だったのかどうかは不明だが、研究機関が研究していることを必死にアピールし、遮二無二に論文を生産し、その生産性を喧伝しないと忽ちクビになる世界が訪れつつあることだけは確かかのである。

しかし、何とか生き残るべく目下の環境への適応を図るだけでなく、よくよく考えてみなければならない。学問としての「目標」や「問題」は、果たして小学生や営業マンにとつてのそれらと同じものなのだろうか。小生が受けるテストは採点が可能なものでなければならぬ。さもなければ得点が謎のまま置き去りにされてしまうからだ。つまり、学生が受けるテストは教師が作成し、解答が一義的に定まっているものでなければならぬ。企業の売り上げ目標も同様だ。未来の結果を目指すとはいえ、目標を定めることが出来るということは、目

的地を過去のある時点で想定しうるといふ意味において既知の到達点である。当たり前のことを言っているようだが、この点を押さえておくことが大事なのである。

なぜなら、科学者たちが集い、頭を掻きながら取り組んでいる問題群は、それを理解することが必ずしも解を導くことに繋がらないからである。学問にとって問題とは、人に思考や作業を強いておきながら、どれほど労力を費やしたところで報われるという保証がどこにもないという、まことに厄介な代物なのである。その意味において、既知の解をもつ問題と解をもたない問題との二つの本性において異なる問題の次元があり、特に後者は大勢の人びとの人生を徒労に導く危険な世界につながっている。

難問とは人を魅了する魔物や怪物に似ている。手なずけることができないだけでなく、逆に人を翻弄し、人生をめちゃくちゃにする危険かつ有毒な生き物だ。我々は怪物の相貌を全く知らないわけではなく、二つほど特徴を挙げることができる。特徴の一つは矛盾、不整合、不一致などの名で呼ばれ、もう一つは無限、無際限、無尽蔵などの名で呼ばれる。多くの問題は、二つの特徴をとともに有する。そして、大きく開いた怪物の口はそのまま「深淵」に繋がっている。

数学でいえば、古くはゼノンのパラドクスがそうであり、近世ならフェルマーの最終定理、近代ならポアンカレ予想やリーマン予想などが有名だろう。リーマン予想は今も解かれていないというだけでなく、その問題の構造や特徴からして最も巨大かつ獐猛な怪物と呼べるかもしれない。

物理の世界に目を転じれば、一九世紀、マックスウェルによる電磁気学の完成がニュートン力学との齟齬を問題化させることになった。その齟齬がニュートン力学を補正するツールとして、特殊相対性理論を導く契機に

なった。その二一世紀版というわけではないが、一般相対性理論の主題（重力）と量子力学の守備範囲にある力の概念との齟齬が「力」の統一をめぐる難問にして喫緊の課題になっている。難問を解決するのがブラックホールの内部を覗き込むような超弦理論になるのか、緩慢な歩みの量子重力理論になるのかはわからない。

生物学を例に取れば、さしずめゲノムと発生との間に穿たれた大きな溝であろうか。ゲノムの解明はむしろそれだけでは発生のコントロールにはほど遠いことを人々に知らしめた。発生の秘密は、生身の身体が具象として現にあるだけに、その明快な印象に反して、謎の度合いを深めるばかりのようだ。発生は各段階でメカニズムやパターンがあまりに異なり、それぞれが独自に複雑さを極める。例えば、身体にはタンパク質など種々の化学的な濃度勾配の網目が張り巡らされているが、発生の謎はその網目を經由しながら生そのものの内部に潜行し、いわば生命の秘密に触れようとしているかのようなのだ。生命をめぐる考察は、その部品を形成する種々の材料を通じて、元素周期表に反響したかと思えば、次には種々の分子的な濃度勾配を通して熱力学の第二法則にも反響し、そうしながらさらなる深みへと降りてゆくように見える。我々は自分たちがどこからどうやって来たのかを知らないばかりか、自分の身体が内側に仕舞い込んでいる幾層にも及ぶ謎についても多くを知らない。生物の進化は、発生しないことや進化の歩みを止めることをも含め、その秘密を未だ奥深い闇に仕舞い込んでいるのだが、その闇に紛れる何かが本当に我々の身体に潜んでいるのかどうかさえ、実はよく分かっていない。

こうして、無限や無尽蔵は具体的な段階や層をとめない、種々の乖離や不均衡の形で姿を現わし、多くの人材を魅了しては幾多の人生を破滅に導いてゆく。

取り敢えず数学を例に取ろう。

科学史を扱った書物の多くで雄弁に物語られているように、フェルマーの最終定理が証明されるまで、多くの数学者の人生が徒勞に終わり、数多くの屍が累々と積み重ねられてきた。^⑥ポアンカレ予想を証明したロシアの内気な数学者は、その榮譽に浴して舞い上がるどころか、人目を逃れ、今も母とともにロシアの奥地に隠れ住んでいるという。その竹まいは、成果主義に背を向け、かつて難問に挑んでは破れ去った幾多の戦士たちの墓標を前に微動だにせず、いつまでも彼らの戦歴を悼み続けているかのようだ。^⑦

今、数学の世界で最も証明が期待されている難問はリーマン予想であろう。深淵そのものの入り口ではなく、深淵を有する城が建っている村の小さな入り口ではないが、そこを少しだけ覗いてみよう。

先ず、A4サイズのノートのまっさらなページを広げる。横野でも方眼でもいい。横に左から右に向かって「1」から「10」まで記入できるよう、一段に桁目を一〇個作る。二段目には「11」から「20」までの文字が記入できるようにする。つまり、すべての数字を十進法に則って順番に記入できるよう、紙に目盛りを付け、小さい順から数字を書き込んでゆくわけだ。

桁目が出来たところで次の段階に移る。最初の空欄に「1」を書き、次の空欄に「2」を記入する。「1」を素数に含めると面倒なことになるから約束上は含めないことになっているが、空欄にしておくこと永遠に空白のままになるので取り敢えず「1」と記入しておく。「2」は最初の素数であり、唯一偶数の素数である。次いで「3」を記入する。次の数は「4」だが、2の2乗であるから空欄にしておいて、隣の桁目に「5」を記入する。また一つ空けて「7」を記入し、これで二桁の数字は終わり（一行目の終わり）。次いで二段目に移って「11」を記入し、一つ空けて「13」、三つ置いて「17」と書き進む。こうして素数を順番に記入してみよう。記入している

うちにどう考えても何らかの秩序があるような気がしてくる。さらに進むと予感⁽⁸⁾は確信に変わり、規則はある筈だと断定したくなる。しかし、さらに作業を進めていくと、抑え難い気持ち⁽⁹⁾が徐々に萎み、つかみ掛けていたものが雲か霞のように消えてしまう。せっせと記入し、その軌跡を眺めながら、規則らしきものを捕まえられそうな気分や期待が浮かんでは消えてゆく。確かな法則性を予感するや否や、忽ちその予感⁽¹⁰⁾は破れてしまうのだが、すぐまた同じ予感が浮上し、沈んではまた復活する。実に不思議な気分だ。

では、ある程度まで素数を記入したところで、今度は空いた罫目の数字に相当する数を片っ端から素因数分解してみよう。「4」の場所に「2」と記入したら、次は「6」であり、「 2×3 」が空欄を充たすべき数である。暇潰しに二〇〇くらいまで素因数分解して、空欄を片っ端から文字で塗りつぶしてみよう。色々と試しているうちに何かしら秩序や方法らしきものが透かし見えるような気がしてくるだろう。素数を並べたとき以上にその予感⁽¹¹⁾は濃厚になってゆくはずだ。その、何だかわからないが「何かがありそうだ」という直感がリーマン予想の証明につながっている。もちろん、その証明は未だ誰にも達成されていない。そうである以上、三学期の期末テストの解答やある企業の今期の目標などの既知の値とは本質的に異なっている。こう言うことでわかりやすくなるか否かはわからないが、その隔たりはポケモンの進化とダーウィンが提唱した進化との違いほど大きい⁽⁸⁾。

質的な隔たりのみならず、量的にもどれくらい異なっているかを明白にしてみよう。小学校の教育課程では一年を三つの学期に分けている。すると、フェルマーの最終定理は彼の蔵書の余白に記されたメモが明らかに⁽¹²⁾なつて以来、実に三六〇年ものあいだ証明されなかったわけだから、なんと、一〇〇〇学期以上に互って延々と「不合格」であり続けたことになる。もしも彼の最終定理に挑んだ数学者たちを営利企業に見立てるなら、三六〇年

も売り上げゼロの状態が続いたことになる。三〇〇年を軽く凌駕する苦闘と徒勞の末に何とか証明されたからよいものの、リーマン予想もベルンハルト・リーマンによる発表から既に一五〇年以上の年を刻んでいる。こちらは解の片鱗は見えてきているようだが、怪物の全貌はまだまだ姿を現わしていない。

因みにリーマン予想はポアンカレ予想と同じく「ミレニアム懸賞問題」の一つなので、賞金は一〇〇万ドルになる。かなりの大金である。成果主義を信奉する経営者は、その賞金を収益と見做して予定を立て、明日から社員を総動員して証明するよう命じるべきだろう。御社の経理で辣腕を振るう者たちなら、きっと一五〇年の年月もなんのその、どれほど恐るべき難問であれ次の株主総会までにはきつと解き明かしてくれることだろう。⁽⁹⁾

深淵に繋がる問題の解明や解決は、課題として引き受けることすら恐ろしいものだ。レスリー・ベアストウのような研究者にとっての〈完全〉と同様、難問への取り組みは人生を丸まる無駄骨に終わらせるリスクをともなっている。だから、「悪いことは言わないから、やめておけ」と助言する人なら少なくともいだろうし、実際に違いない。でも、魔が差したかのように問題に魅了されてしまった者たちに「禁止」の言葉を告げる者など一人もいないだろうし、舌打ちしながら「だから、言ったことじゃない」と眉を顰めるような者も滅多にないだろう。ただ、そう口にした台詞を呑み込み、顔に憂いの色を浮かべる者たちなら無数にいたに違いない。なぜなら、人は彼らの姿にある種の殉教者を見て取るからである。解ける見込みのない問題（もしくは見込みが限りなく薄い問題）に人生を捧げることを、それゆえ我々は「聖なる愚拳」と呼ぶことにしよう。

無用の長物が崇高な芸術性を帯びるのと同様、無為に等しい生もときに聖性を帯びるのだ。それゆえ聖なる愚

挙とは、人跡未踏の価値に賭ける無茶な行為を意味することになる。価値の姿は臙げであり、辛うじて目的地ないし目標らしきものが存在することはわかっているものの、その場所もまた宿命的に未知である。当然ながら、誰ひとりその場所に足を踏み入れたことがない。命じられたわけでもないのに、広大な砂漠とも荒れた湿地とも区別がつかぬ未知の世界に足を踏み入れようとする者、すなわち愚挙に殉じる者たちは、さしずめ聖なる愚者とでも呼ぶことができるだろう。彼らを白痴と見紛うのは、知能が高すぎるためでもなければ身なりがだらしないからでもなく、ただ人生のすべてが徒労に終わるリスクを重々承知していながら一度としてその危険を省みようとしなかったからである。

レスリー・ベアストウの不毛ないし非生産性はさしずめ聖なる愚挙の証であるだろう。何も書かないということとは完全な分類の夢がついぞ実らなかったことを意味する。しかし、その不毛な時間は完全な無為ではなく、むしろネイピア数や円周率を延々と計算し、地道に文字列を書き出してゆく作業の虚しさに匹敵するはずだ。終わりの見えない作業に費やされた人生は、それがもしも完了を約束した上でのことであるなら、全くの徒労に終わったことになるだろう。同じ夢に賭けて競い合った無数の人生も同じく完全な徒労に終わったということを含意する。その意味で、聖なる愚挙とは、言ってみれば「偉業（および偉人）」の傍らに落ちている枯れ葉か、かさかさに乾いた昆虫の死骸のようなものである。

とはいえ、聖なる愚挙は偉業の反対物ではない。累々と重なる愚挙の屍があつてこそその偉業である以上、偉業こそ愚挙の山の頂きに聳える奇跡であり、さらに言えば愚挙の群れの中に突如として現われた突然変異である。どうして突然変異という語彙を用いたかと言えば、どんな偉業であれ、それもまた無為に等しい「成果なし」と

の空虚な捨て台詞で終わる可能性が高かったからである。つまり、深淵に足を踏み込み、手ぶらで帰ってくる可能性の方が遥かに高い賭け事に手を染めたという意味において、数多の偉業は始めから聖なる愚挙の一部だったのである。加えて、当初の課題に対する「成果なし」は、いかなる成果もともなわなかったことを必ずしも含意しない。たとえ所期の成果は得られなくとも代わりの獲物が副産物として得られることだつてあるからだ。また大した成果のない生であつても、だからといって虚しかったとも限らない。成果はないが悔いもない可能性だつてある。

天文学的な発見に使われる比喩に「砂漠で砂粒一つを選び分ける」という表現がある。まさに白い砂浜で米粒一つを拾い上げるような可能性（および夥しい無駄足・無駄骨の可能性）に敢えて手を染める者たちの中から、稀に偉業を成し遂げる者が現われてくるというわけだ。その点においても、偉業は桁外れの例外というわけではなく、聖なる愚挙の一部であり、始めはどれもが砂漠に舞い上がる砂埃に紛れていたのである。

しかしながら、二一世紀の成果主義は（聖なる愚挙）などというカテゴリーを断じて認めようとはしないだろう。せいぜい「戯れ言」と誇る程度だ。とはいえ、成果主義者の耳は我々の言葉を聞き流すこともしない。聞き流すどころか、決して承認しないという点において、それは（聖なる愚挙）を固く禁じ、永遠の追放を試みているのだ。近代科学の内部に徒労や無為、もしくは不毛などの入り込む余地は悉く整地され、代りに定期的に森林資源を食い潰す浅薄な結果が堆く積まれるようになるとき、実は同時に追放されるものがある——「深淵」とその謎に繋がる問題群、そして深淵に吞まれ、難問に食い潰されることを厭わない奇特な生である。

ジャン・フランソワ・リオタールが「ポストモダン」を提唱したときのことを多くの人は忘れているかもしれない。標語としてのポストモダニズムを鼻で笑うのはたやすい。彼はその条件を「大きな物語の終焉」と定義していた。「解放」の物語がその典型だった——ゆえに激怒する者も少なくなかった。さらに「真」「善」「美」など科学論文や芸術作品の目的にして属性でもある語彙が含意する〈価値の物語〉の終焉も条件に含まれる。

そう、近代以降を生きる研究者は、もはや真理を追究するのではなく、同業者たちの承認を目指すのである。彼らは老賢者の矜持を継承するのではなく、競争者を出し抜くべく自分自身の宣伝マンとなって着々と業績を積み上げる。キャリア形成のためなら、パクリだろうがコピーだろうが何でもやってのける——気づかぬ（もしくは騙された）奴らの方が阿呆と言わんとばかりの惨状だ。さらに彼らの見習いたちを待ち受けているのは、端から見れば醜惡としか言いようがない形式主義的な「体裁」と各業界に固有の奇っ怪な「文法」および「語彙」の習得である。古典的な形式主義者は、論理的な整合性に重点を置き、形式化とその美こそ立派な論文の条件であるかのように信じ込まされてきたが、今や重きが置かれているのは論理の堅固さでも文体の美学でもなく、社会的な形式を無条件に受容して見せる、徒弟の従順さなのである。

その結果、今や「ポストモダン」という言葉すら大きな物語すぎて誰も口にし得なくなってしまった。研究者にとって論文執筆も研究発表も、子どもの自由研究と同じ次元に墮することとなった。人生を賭けるといった大仰なギャンブル性もはや相手にされず、一切は〈課題—遂行〉の達成モデルに準じて構築されることになった。こうして粗製濫造され、堆積するばかりのブツをいったい誰が読むのだろうか？

誰も読まないし、読まなくてもいい。一文たりとも読まずに評価できる指標が用意されているからである——

査読つき雑誌への論文掲載数や被引用数といった指標がそれだ。しかも、昨今は掲載を金で買える雑誌が次々に公刊される状況である。いかにも怪しげな雑誌ならまだしも、権威の頂点に君臨する高名な雑誌ですら、半ば掲載料徴収機関に変貌しつつある有り様である。ネット時代は紙で印刷する手間が省けるから学術誌市場も肥大化する。尤もらしい雑誌名を掲げているが、その実、怪しげなものまで含めれば、その手の専門誌の数は毎年倍々の勢いで増える状況になっているという。そうであればこそ、読まずに評価できる指標はなおのこと不可欠と言えよう。しかし、少なからぬ引用者や参照者は現物を手にとったことはおろか、肉眼で認めたことすらないと伝えられる。なのはどうして引用できるかつて？ わざわざ孫引きの事実を明かす必要はあるまい。誰か一人が引用しさえすれば、仲間うちでは互酬性に従ってコピーのそよ風が吹き抜けてゆくという按配である。こうして検証不可能かつ再現不可能な戯れ言も立派に流通し、その事実を誰もご存知ない盛況振りとなる。

しかしながら、その種の指標が蔓延り、前もって論文の評価を与えてくれるのなら、もはや論文の「真価」を問うことができる人間などいなくてもよいことになりはしないだろうか。その通り。「真価」などという古の玄人にしか通じない前近代的な価値基準など初めから不用なのだ。そうであればこそ単純に数値化された「指標」は「真価」に代わりうる今日的かつ平明な基準として機能することを期待されているのである。

おわかりだろう。もはや学術論文には文体の華やかさなど不要であり、構成の巧みさも必要ない。作品としての気品や風格などという勿体ぶった贅など要らないし、読む者をうっとりさせる「美」を誇るにも及ばない。論文とは今や作品ではなく、書類の束であり、掲載の事実を売買する商品であり、研究生活を維持するための切符なのだ。こうして莫大な数の論文が産出され、読む営みとは無関係な文字列が浮かんでは消える無気味なマー

ケットができあがると相成った。

しかしながら、読まれざる論文をせっせと産み落とす時代、ほかならぬ現代にしながら、同時代を生きる研究者たちは決して涙など流してはいないし、陰鬱な表情を浮かべているわけでもない。存分に苦悩し、無知を嘆き、時代を憐んだのは古の賢者ばかりである。逆に現代を生きる者たちは元気であり、快活なのだ。

二一世紀初頭の科学研究室には、かつてないほど強い目的意識がみなぎっている。つまるところ、わたしたちは競争の時代に生きているからだ。以前は、舞台裏の人々にはもつとゆとりがあり、好きなように奇抜な試みをすることができた。たとえば、見事なペポカボチャをつくろうと、根覆いを試みたり、自家受粉を何代も続けたりした。そうした余裕は、公務員の終身雇用が守られているからこそ生まれたものだった。「貨幣石世界」を創案したランドルフ・カークパトリック、『絶望した男の日記』の著者、W・N・バーベリオン（ブルース・カミングス）といった人物が、現在の趨勢のなかではたして生き残れるだろうか。⁽¹⁰⁾

「目的意識がみなぎっている」と言えば聞こえはいいが、実際にはノルマに追われる営業マンと同様、「業績」という単語に背中を小突かれて無理に走っているだけだ。研究以外の業務が爆発的に増加し、みんなが疲弊しながらも業績発表の圧力と陣取り競争だけは日増しに強くなるため、研究室に集う人々の顔はどれも焦燥感に駆られ、軽い躁状態に陥っている。大々的な新発見もときにはあるだろうが、高揚する顔には充血した眼球と寝不足のためのクマが添えられ、室内には素直な歓びというよりも無意味な病的興奮が漲っている。どれほど悲しくな

ろうとも、これが現代の賢者が棲息する空間なのである。

因みに文中のブルース・カミングスとは一九一二年、大英自然史博物館のキュレーターになった博物学者のことで、彼は幼い頃からの夢が叶って希望の職種に就いたものの、不幸にも多発性硬化症を発症し、一九一七年に退職を余儀なくされてしまった。文中の『絶望した男の日記』という作品は、彼が退職後に発表した本であり、序文をH・G・ウェルズが書き、重苦しい内容ながら、ジョイスやブルーストといった文豪たちからも賞賛された。フォーティは、キュレーターとして職に就く前に彼が書いた日記の一文を引いている。⁽¹⁾

海辺の広々とした静かな研究所、あるいははりっぱな自然史館のホールに、卑しい争いや競争や猥雑さはそぐわない。その扉の向こうでは、人生はゆっくり深く流れる。(一九一一年三月四日)

「自然史館」という言葉にやや違和感を覚えるが、今は措くとしよう。それより問題なのは、かつて存在した「扉の向こう」が今や大英帝国だけでなく、世界のどこにも存在しないということだ。昨今は何もかもが開け放たれた扉のこちら側にあり、突風を遮るのはガラス張りの窓のみという有り様である。情報公開の美名の下に、万国の研究者たちが、それまでの奥ゆかしさはどこ吹く風とばかりに、秘めたる露出癖を存分に発揮し、おのれのすべてを人々の耳目に晒しているというわけだ。

だからこそ強調しておかなければなるまい。諸科学は、その本質部分にかつて刻印されていた聖性を取り戻そうとしない限り、このまま浅ましい成果主義に吞まれ、剽窃の汚名に塗れ、コピペの底無し沼に溺れるほかない

だろう。学問の聖なる時間——そこでこそ「人生はゆっくり深く流れる」。しかし、深くを流れるものについて、今やそれがあることすら人は知らない。

二 「パンとサーカス」——自発的隷従と民主主義

あの気弱げな顔貌のIOC会長、ジャック・ロゲ氏の「トキヨ」という、か細くも甲高い声で二〇二〇年のオリンピック・パラリンピックの東京開催が決まった。その発表会場における関係者の爆発的な歓喜の光景や、その瞬間の盛り場やスポーツバーで喜ぶ人々の姿は記憶に新しい。直後のマスコミによる大量のオリンピック礼賛報道——多少の批判的な記事はあつたにしても、稚児めいたはしゃぎようは隠しようもない。しかしそれにして、何がそんなに嬉しかったのであろうか。

招致関係者たちの喜びはわかる。最終プレゼンテーションを行なった人々や彼らを支えた関係者にとって、招致運動の長い道のりとその労苦を思い返せば、さぞ大きな達成感があつたであろう。目標を一つにして多くの人々と心血を注いだ協働作業が実を結んだのだから、当事者たちの喜びは理解できるし、また心から拍手を贈りたいと思う。特にアスリートたちの純朴で真摯なプレゼンテーションには、誰もが好感を持ったであろうし、そんな彼らの歓喜する姿に批判的な目を向ける人は少ないだろう。それに、高いレベルのスポーツ競技を身近で見られるのは喜ばしいことでもあり、そのことを素朴に喜ぶのも悪いことではない。

とはいえ、些か冷めた目でみれば、感情表出の様態は同じに見えたとしても、関係する人々の立場はそれぞれ

異なり、目的も異なっている以上、喜びの質も彼らの依って立つポジションによって異なるという事情が見えてくるはずだ。敢えて言えば、歓喜の渦のなかでどれほど意識されていたかは不明だし、個人差や立ち位置の違いがあるにしても、彼ら関係者に共通しているのは、各々の立場における社会的な定位（世の中をうまく渡っていくこと）を確実にする、そうした実利獲得の可能性が増すという確信である。複雑に錯綜する目的意識の間に「利害の一致」が見出されるなら、その約束手形に誰もが手を伸ばすのは事の道理である。だが、未決済の手形には期待と不安が付きまとう。もとより国家的イベントの招致活動は博打であり、過去の失敗経験の恐怖が彼らの高まる期待を暗雲で覆いかねない。ロケ会長の覚束ない声に招致失敗の恐怖が重なり、それこそ絶望の予感と歓喜の期待とが表裏一体になった緊張感の高まりを、最高の結末によって解放され、歓喜が弾けたのである。だから、当事者ではない者たち、すなわちスポーツバーで喜ぶ「純真な民衆」とは、見た目の感情表出は同様でも感情の背景と源泉が異なり、また喜びの質と強度も異なるのである。

スポーツの世界ではよく見られることだが、競技そのものから生まれる競技者の感情と、それに同調し感情移入する観衆の高揚感や興奮が、大きなうねりとなって周囲に波及してゆく。周囲とは例えば競技団体であり、大会開催者であり、またマスコミや広告業界に代表されるような周辺利得の掠奪者である。これら関係者たちの社会的定位に向けた底意とそれぞれの手法が複雑にリンクし、同床異夢の利得構造が渾然となって「歓喜空間」が波が広がるように生産されてゆくのである。

もちろん同様の構造はスポーツの世界に限ったものではない。宗教における信仰そのものと信徒や教団との関係、もしくは芸能における演者の演技と観客や興行者との関係についても同様の利得構造の「歓喜」を見て取る

ことができるだろう。さらには国家の政治的統治における為政者の振る舞いや統制機構のメンバーたちの反応、そして国民・大衆の集合的な情動とそれらの錯綜から生まれる種々の利得のマネジメントをめぐつて、同様ないし類しの構造が築かれてきた。政治ないし統治とは、それゆえ為政者の振る舞いでもなければ国民の情動や利害でもなく、我々が右の文にあたかも付け足しのように加えた一語、「マネジメント」に尽きるのである。

競技における勝者の喜びをまるで我が事のように同時体験的に感涙し、他人の喜ぶさまを言祝いだかと思えば、翌日は敗北に落胆する姿に同情してまた感涙する。他者に同調し、互いに寄り沿おうとする、いわばヒトの「善き心性」は爾来、人間集団の維持に不可欠な資質として機能してきた。あたかも互いの磁力に引き寄せられるように集団が形成される以上、社会は常に固有の力学を有する。言い換えるなら、ヒトの「善き心性」は集団内に流通する財と欲望の支えとなってきたのである。財の交換と婚姻体系、集団の凝集性、そして儀礼における苦痛と快楽、熱狂と興奮——これらは人間に固有の社会性を支えにしている。ゆえに、その心性は大昔から集団統制の要となり、利得獲得の動因としてまた根拠としても活用されてきた。

「サーカス」（ユウエナリス）は我々を惹きつけ、高揚させる。特に、極限にまで高められた身体が超人的に躍動し、しのぎを削る競技は、伝統的な「儀礼」を近代的に「興行」化し、古代オリンピックの儀礼空間は今や大がかりな扇動機能を備えたイベントとして地表のすべてを蔽い、大陸を跨いで人々に忘我の歓喜をもたらすようになった。かつてオリュンポスの山における神々の争いは詩人の口を借りて伝えられたが、今や天界の闘いは人工衛星から届けられるサッカーのワールドカップであり、近代オリンピックク的なのである。

ただ、「トキヨ」に対するあの歓喜は、巨大な「サーカス」がやって来ることへの期待感・高揚感の爆発的な

表出だけではなく、現代の「サーカス」に組み込まれている、より実利的な「パン」への獲得期待——権力・利得の統制を目論む側にすれば上手く「パン」を配ることができたことへの安堵——の表われでもあるのだ。

モンテニユの若き日の刎頸の友であり、夭折した一六世紀の政治理論家、エティエンヌ・ド・ラ・ボエシは、感情を操作された民衆が自ら圧政者に従う姿を指してこんなことを言っている。

芝居、賭博、笑劇、見世物、剣闘士、珍獣、賞牌、絵画、その他のこうしたがらくたは、古代の民衆にとつて、隷従の囿、自由の代償、圧政のための道具であった。古代の圧政者は、こうした手段、こうした慣行、こうした誘惑を、臣民を輓の下で眠らせるためにもっていた。こうして民衆は阿呆になり、そうした暇つぶしをよきものと認め、目の前を通り過ぎる下らない悦びに興じたのであり、そんなふうにして隷従することに慣れていったのだった。⁽¹²⁾

あの開催決定以来、ご存知のように、政・官・財・学に元選手を加えたトップヘビーなオリンピック準備委員会が組織され、スポーツ関連業界のみならず、毎度のことながら、マスコミ・広告業界と土建業界などお馴染みの「パン」の受益者たちが、この種のイベントから生まれるであろうおタカラへの期待に胸を弾ませている。そのイベント規模を、つまりパンの大きさや「うま味」を、寸法や金額といった数値で示すことができる手っ取り早い象徴とは何か？ プロジェクトに対する遂行能力の高さを目に見える形で表現し、おらが集団の自尊心を刺激しつつ、また映像素材として祝祭感を醸成するのに最適な物体、そう、それがメインスタジアムである。

これまでの五輪やサッカーW杯では毎回のように、スタジアムの工事が遅れているとか、建設にいくらかかったとか、奇抜なデザインだとか、とにかくメインスタジアムがマスコミの定番記事として取り上げられてきた。今度の東京オリンピック・パラリンピックでは、老朽化した国立競技場が建て替えられることになっており、すでに準備工事に着手している。国際コンペで新国立競技場の原案が選出されたのだが、あまりにも巨大であり、環境にも悪影響が出ると、毎度の批判が今回も出されていたが、「反対意見にも配慮した」というアリバイ作りをしながら「肝である巨大さ」を維持するといった、いつもどおりの予定調和的な決着を見定めての見切り発車である。

三層からなる観客席は八万人収容で、サッカーやラグビーのときにはトラック部分に観客席がせり出し、遮音や天候に対応することでコンサートなどにも使い、利用率を高めるように開閉式の屋根が計画されている。また屋根には芝生育成に有効な透明素材が採用される。新スタジアムは当初、予定建設費（コンペ募集時）が一三〇〇億円であったが、選ばれたイラク出身の女性建築家、ザハ・ハダイドのデザイン案を試算したところ三〇〇〇億円にも膨らんでいた。

途方もない金額であるとはいえ、殊更に驚くべきではない。ジョルジュ・バタイユが宗教性の濃厚な「一般経済学」シリーズで熱っぽく語っていたように、「聖性」は「なぜ？」という問いを弾き返す途方もない物体に付与される。ピラミッドや万里の長城は人の「なんでまた、こんなものを？」という問い掛けを超越するがゆえに偉大なのだ。私の知人に二メートルの鉄のサンダルを、それも右足用のみ作った美術家がいるが、彼の作品のサイズが二二センチ程度に収まり、しかも左右揃っていたりしたら芸術品としての資格を欠いていたところだろ

う。マルセル・デュシャンのスキヤンダラスな「泉」も、もしも便器がきちんと下水に繋がって、用を足せるとしたら、きつと美術品としての資格を奪われたことだろう——そのとき「泉」は単なるトイレに過ぎなくなる。用途から切り離され、理性（＝理由）の問い掛けを拒むことで、初めて物質は芸術的なオーラを纏う。

したがって、ザハ・ハデイドのスタジアムを単なる運動場ではなく、近代文明を象徴する聖なるモニュメントにしたいのなら、びた一文、費用を削るべきではない。むしろ、もっと贅沢な部品を、もっと丈夫な建材を、そして、もっと派手な装飾を、といった具合にさらに経費を積み上げ、耐用年数が数千年に及ぶ堅牢な怪物的モニュメントの施工に取り掛かるべきだ。それが東京都破産に追い込み、国家の行く末を危ぶめることになったとしても、歴史的な事業として断固、建設を強行すべきなのだ。なぜなら、それがオリンピックの招致と開催を宗教的な儀礼と化し、一切を「聖なる愚行」にまで磨き上げる唯一の道だからである——地獄まっしぐらの公共事業！

しかし、官僚的な愚行の道行きが聖性と無縁なのは周知のとおりだ——彼らは三〇〇〇億円の試算に目を丸くし、当初の予算案に収めるために慌てて机の上の書類をめくり、次々に引き出しの中をかき回し、アドバイスしてくれそうな人たちに片っ端から電話を掛けた。

「それならば」と「技術・経済的な設計」なら得意な日本の大手設計事務所のコンソーシアムが億劫そうに——嬉しさを隠しながら——重い腰を上げ、コストダウンを目指して基本設計を担当した結果、なんとか一六〇〇億円台に収めたという。

それにしても、である。三〇〇〇億円の試算が招いた茶番の顛末は、我々に何を知らせてくれたのか？ もち

ろん金額の途方もなさではない。むしろ疑問なのは当初予算として立てられた一三〇〇億円という数字の根拠および妥当性であり、またそれ以前の建て替えるという計画それ自体の正当性である。金額であれ、建て替え計画であれ、それらはいずれも実質的な「公論」に付された気配がない。あたかも最初から既定路線がそうであって、誰もが事の次第を承知していたかのごとく物事が進んでいた。我々が思い知らされたのはその事実である。

実際、国内の建築家たちから「建て替え」ではなく「改修」すべきとして様々な案が発表されていた。短絡的にスクラップ・アンド・ビルドへ直行するのではなく、先ずは環境を顧慮しつつ機能的な必要性を追求する案に目を向け、真摯に検討すべきなのだ。しかし、決してそうはならない。慎重しく、ゆえに現実的でもあるはずの案の数々は結局、一瞥されるだけに終わった。それは分かりきった結末だった。というのも、毎度のことながら「うま味を減らしてパンを小さくする」案は巧みに葬り去るためにのみ組上に載せられるに過ぎないからである。三〇〇〇億の茶番と現実的な改修案への一瞥が教えてくれたのは、したがって、はじめに「一三〇〇億」ありきの喜劇的な筋書きだったのである。

さて、大手設計事務所らによる「改善案」では、高さ七五メートルだったものを五メートルほど低くして景観に配慮したという。有識者会議の委員、安藤忠雄をして「バランスは良くなった」と言わしめたが、日本建築界の重鎮、建築家の槇文彦は「五メートル低くしても人間目線から感じる威圧感と同じ……巨大な土木構築物という印象」と当たり前のことを語っている。ともかくにも、解体費も含めれば一七〇〇億円の新国立競技場の建設をはじめとする巨大建設プロジェクトが始まるのである。これまた毎度のことながら建築の〈量塊性〉ゆえの環境・機能・経済効果・景観・芸術性などがせめぎ合う議論——談合調和とは言わないまでも、いつものよ

うに経済のアクセルを踏むこと以外の価値を認められないような巨大構築物の建設が、いつの間にか承認されているような議論——が沸き立っては、やがて静かに目論見どおりに着地するのである。

ザハ・ハデイド案のデザインが俄かに耳目を集めているところへ、一九六四年の東京オリンピックで丹下健三と並び称された亀倉雄策——あのポスターは実に美しかった——の活躍を思い描いたのか、主役たる建築デザインへ割り込むようにしてグラフィックデザイン界からも「デザイン開花するような東京五輪に」といった存在誇示とも読めるし、イヌのマーキングとも見紛うような発言も出てきた。¹³ まことに賑やかなことである。もちろん建築やデザインの分野だけではなく、「パン」の直接的な源泉たるスポーツ界——実際にはスポーツ権益圏——では政治的主導権争い、権力闘争がすでに幕を開けている。

「トップ選手の強化は国主体で」という文言はスローガンとしてはシンプルだ。暗に選手強化を目的とした公的資金の流れを指すと分かっていても、さほど複雑な印象は受けない。しかし、スポーツ省の設置を企てる超党派スポーツ議員連盟が公的資金の流れを一本化するべく、日本スポーツ振興センター（JSC）を改組して、新独立行政法人を発足させる骨子案をまとめ、政府・文科省へ提言すると聞けばどうだろうか。もしその案が実現すれば、日本オリンピック委員会（JOC）は選手強化の総本山としての地盤を失いかねない。だから彼らは慌てて反対の声明を出した——「現場に支障を来す可能性があり、二〇二〇年東京オリンピックに向けて今現在の強化体制を崩すべきでない」。¹⁴ 強化費や組織運営費がどちらの側から流れてくるかは、競技者たちの強化に原理的には何の関係もない。あらためて官僚が事細かに統制し、政治家がいちいち「口出し」できる組織を作って、そこから公的資金を流したからといって、スポーツ全体が振興し、トップ選手の競技力が向上するなどは到底思えない。

それゆえ問題は議論ですらなく、結局のところ権益・権力の綱引きなのである。議連の提言に、いわば、いきなり他人の懐へ手を突っ込むような浅ましい目論見が透かし見えるのは、そのためだろう。

ところが、権益に対する議連の痴漢紛いの行為に口実を与えているのが、JOC傘下の競技団体における組織統治能力の低さと欠如なのだ。新聞やテレビでも度々報道されているからご存知だろうが、全日本柔道連盟では指導者による日常的な暴行を選手たちが告発するという事案が話題になり、金メダリストによる悪質なセクハラとレイプ事件は連日報道され、さらには助成金の不正処理なども発覚し、挙げ始めたら枚挙に暇がないほどである。

お家芸の柔道ほど話題にはならなかったものの、日本ホッケー協会の内紛も深刻だった。協会による男子五輪予選代表チームの決定に対し、日本リーグを構成するチームの大半が反発して、脱退を表明した。その結果、国内トップのリーグが休止に追い込まれた。また、他の競技団体でもみられる話だが、専任コーチが国の補助金を含む報酬を協会に返納するよう求められるという疑いが浮上し、執行部と反執行部の内紛が激化している。⁽¹⁵⁾

その他、全日本テコンドー協会でも不正経理が発覚したり、日本フエッシング協会でも補助金の不正受給などが問題になった。

これら傘下組織の統治問題が相次いだことから、JOCは「懐に手を突っ込まれている」のである。どうやらこの問題については権益・権力の綱引きのみならず、統治術の視点から事象を見直す必要があるようだ。いかに不祥事が生じたのかを説明するに足る構造的な理路が明らかにされなければならない。難しい問題だろうか。いや、実に単純な答えが待っている。すなわち、選手時代の強者がそのまま組織運営上の強者として君臨すると

いった、日本のスポーツ界にありがちな（先輩・後輩）的（上意下達）関係の構造化とそうした組織に特有の体質、すなわちヒエラルキーの上部に昇れば昇るほど規制が緩くなり、規範意識が低下し、何もかも杜撰になってゆく体質に原因がある。

なるほど、かつての相撲協会の度重なる不祥事や運営上の諸問題も同様のところから生まれた。しかしながら、組織の中枢部における構造的な特性だけが統治機能の障害を引き起こす原因ではない。もしも組織制度を改革し、外部からマネジメント能力のある人を迎え入れたとしても、そこに権益が生じる可能性がある限り、やはり類似の問題が生まれてくるだろう。問題が根深いのは、その根っこに人間の本性が絡んでいるからだ。人が集団を作れば、どのような形態・形式にしようとも、人が交わるところに必ず力関係が生じる。力が発生するということは、欲望や願望が流れるための回路と方向性が与えられることをも含意する。回路と方向性が与えられれば、物質的と精神的とを問わず、種々の利害関心が利得の流れと不利益の通り道とに、さまざまな勾配を作り出すことになるだろう。人々はそれぞれが社会的な生存域を確保するために、力関係の構造化を図る——権力構造。次いで彼らは組織的に権益の流れを固定し、恒常性の維持を図るだろう——この場合の恒常性はホメオスタシスよりも流れの「安定」に力点が置かれる。

さて、もしも右のような組織に問題が生じたとき、それを解決するのではなく、逆に症状をこじらせ、悪化させる要素があるとしたら、それは那邊にあるのだろうか。素朴に考えるなら、組織の最上部にあって、権力を自儘に振るうべく権益機構を作り出し、維持しているボスこそが主犯の座に鎮座しているようにみえる。しかしその真の主犯は、言ってみれば力と利益の流れが出てくる源泉ないし結節点であり、いわば組織そのもののものだ。

とすれば、ボス自身であるよりも、ボスを支え、ボスに隷従することで権益の流れを確保し活性化させる下位の権益受益者にこそ問題があることになる。加えて言えば、さらにその下にぶら下がり、細やかな恩恵に与ろうとして隷従の諸層を生み出し、回路を延長し、つまらぬことで感涙する、ごく普通の人々の習慣化した行ないこそが問題であるとも言えるだろう。

思い出すがいい、今回のオリンピック・パラリンピック準備委員会でも、大急ぎで政財界の大物をボスの群れに据えていた。また組織委員会の理事会に助言する「顧問会議」では、最高顧問である安倍晋三首相の次に位置する「特別顧問」に西武グループの総帥で、初代日本オリンピック委員会会長だった堤義明氏の就任を決めた。だが彼らは、いわば仮面劇の仮面でしかない。収奪されることの最も少ない象徴権力を最上位に戴き、その静かな仮面の下で、多くの財が動き、配分が円滑になるように、何かが絶えず蠢く、そうした仕組みを拵えようというわけだ。先ずは「王」を据え、次いで上位者に積極的に隷従することで、下位者たちによる権益のミニ国家が半ば自動的に築かれる。したがって、王国は単一かつ均一の組織ではなく、無数のミニ国家が芽づる式に連なる複雑怪奇な複合体であることになる。だから、下位者にも無数の階層があり、各階層に各競技団体があつて、そこに加盟している指導者層と彼らの領土に引つ立てられて競技に勤しむ選手層との間にミニ専制主義が敷かれることになる。つまり、上下関係の組織制度と、その空氣に馴染んだ住人たちの意識は、組織形成とともに育まれ、心的構えとしての「自発的な隷従」により今も支えられているのである。

〈自発的隷従〉は、「自発的」と言っている点にすでに明らかだが、意に反して屈伏させられた結果ではなく、パンをとまなう「サーカス」の場における歓喜と高揚感のうちに育まれる。隷従の境遇が恐ろしいのではなく、

それが自発的になることが恐ろしいのだ。なぜなら、隷従が習慣となり、延いては喜びとなれば、おのれの自由や子供の生命といった最重要な事柄に關してすら、常に「ウエ」の決定に判断を仰ぎ、一切について身を任せきり、それを厭わなくなるのだ。それゆえ古代より「パンとサーカス」は統治の道具として支配者に活用されてきた。

五輪の東京招致プレゼンテーションにおいて、アスリートたちの純朴な熱意あるスピーチと、あたかも同質の「善きこと」を語るがごとく、安倍首相は「フクシマ」は完全にコントロールされており、安全であると語り、出席者たちの誤った理解を意図的かつ戰術的に誘導した。未だ汚染水の流失が止められない現況をもって安全というのは相当な無理がある——汚染水とは内部に中性子が飛び交い、ただの水を次々にデュートリウム（核に中性子が一つ結合した水素の安定同位体）やトリチウム（核に中性子が二つ結合した水素の放射性同位体で半減期は一二年強）を含む重水へと作り変えてしまう代物だ。重水を飲むと喉を潤すどころか猛烈な渇きに襲われ、さらに飲めば命に關わる。⁽¹⁶⁾候補地に暮らす多くの人々の疑念が払拭されず、釈然としない何かが燻り続けていたのは明白だった。だがそうした何もかもが、あの「トキヨ」を合図に弾けた歓喜の前には霧散してしまい、隷従が習慣化した我々は指彈の声を上げることもなかった。

彼の首相は「サーカス」の提供に熱心である。二〇一三年五月五日、こどもの日の東京ドームにおいて或るセレモニーが開催された。長島茂雄と松井秀喜の国民榮譽賞および松井の現役引退をとともに記念するセレモニーとして、バッター長嶋、ピッチャー松井、キャッチャー原辰徳での始球式を設え、おまけに自ら主審を務めた。また三二年間続いたタモリの番組「笑っていいとも」にも長寿番組の終了という話題性に便乗するようにゲスト

出演し、「普通人」としての首相像を演じて見せた。

こうしたマスコミ露出の一方で、圧倒的な議席数を背景にして声高に「使い勝手の悪い」憲法を改正すべきと繰り返して語っている。だが、憲法改正の本丸への直截なアプローチが、どうやら容易でなさそうだと分かっていると、今度は集団的自衛権の解釈という、憲法九条問題の捌め手の寝技へ持ち込んだ。さらには集団的自衛権の行使容認の事例検討というように、問題が「小さな事」に見えるよう細切れにし、敢えて目立たないように仕込み直して、何がなんでも「喧嘩の出来る国」に日本を仕立て上げようとしているようにみえる。しかし、どのように取り繕っても、行政の憲法解釈に無限の自由裁量が付与されようとしているのだ。法改正の必要性を叫び、法案作成の努力を怠らぬように振る舞いながら、その実、始めから法を遵守するつもりなどさらさらなく、結果的に法治主義を踏みにじることになった。

おりしも二〇一四年はサッカーW杯開催年でもあり、マスコミによる「サーカス」の狂騒曲の鳴り響く中で、「喧嘩をしたい首相」に対する非難や異議申し立ての声はいかにも小さく、人の耳に届き難くなっていた。問題は、安倍政権の性急な右傾化や原発問題に対する乱暴さではない。目の前をよぎる些細な悦びに興じて、見過ごし得ない問題を組上に載せることさえ困難にさせる我々のふやけた態度が問題なのである。もつと言えば、反抗を若気の至り（もしくは「中二病」）と決めつけ、自発的隷従を落ち着いた大人の態度とばかりに開き直る習慣こそが問題なのだ。そして、そのようなシニズムを植え付け、蔓延させた文化的な仕組みこそが問題なのである。何とはなしに景気が上向いているような雰囲気醸成による「パン」のうま味の予感と、「サーカス」の歓喜の狭間で、誰もが「自発的隷従」に身を任せ、政治的ないし経済的な支配の強化を支え、延いては暴走をも無

限に許しかねない余地を取って拡張し、自らの被支配者としての位置を確定させ、こうした仕組み作りに手を貸している、その事実が問題なのである。

そういうわけで、軀のもとに生まれ、隷従状態のもとに発育し成長した者たちは、もはや前を見ることもなく、生まれたままの状態で満足し、自分が見いだしたものの以外の善や権利を所有しようなどとはまったく考えず、生まれた状態を自分にとって自然なものと考えるのである。∴「中略」∴習慣というものは、あらゆることさらに関してわれわれに大きな力をおよぼしているのだが、とりわけ隷従を教えるについては、ほかのどんなことよりも大きな効力を発揮する。つまり、いつも毒を飲んでいたミトリダテスのたとえもあるように、習慣はなによりも、隷従の毒を飲みこんでも、それをまったく苦いと感じなくなるようにしつけるのだ。⁽¹⁷⁾

こう語ったラ・ボエシは、人間本性の最も重要な一部である「自由」を放棄して、自ら被支配者の立場を獲得しようとする〈自発的隷従〉という、その人間集団の倒錯的なあり様が支配・被支配の関係の根底を成している」と指摘し、著書『自発的隷従論』では多数者が一人の者に隷従する不思議と二者支配の不幸について書いている。しかし、我々が今経験している現代社会における権力の行使とそれによって生まれる被支配の状況は、捉え方によつては彼の時代（一六世紀）以上に厄介なことになっているように思える。

なるほど「喧嘩がしたい首相」は政治の表舞台で頂点に立つ者と見定められる「一者」ではあるだろう。だが

ラ・ボエシの時代とは異なり、選挙の結果次第で彼を政權から退かせることもできる。しかし、いくら首相を替えたところで、「閉塞感」と名付けられた鬱陶しい気分が一向に晴れない我々が社会の本質を変えることは、残念ながら誰にも出来ない。一者支配の時代よりも敵の姿が不明瞭になってしまっただけに、どちらに向かつて拳を構えればよいのかもわからず、それゆえ日々刻々と混迷の度合いを深めているように思われるのだ。我が国には古代の暴君のような気紛れで残虐な支配者は存在しない——おのれを君主と勘違いして自惚れる自治体の長はいくらか目にするが……。事実、我々にしても名目上のみならず実質的に自由と平等を保証され、政治的な選択権もどうやら与えられている。学校でも「国民すべてが主人公の民主主義国家だから」と教えられてきた。しかし、誰もが何ものからも支配されず、完全に自由だと言い切ることはできない。無論、野放図な様子や傍若無人な振る舞いが乏しすぎると主張したいわけではない。たぶん、誰しも等身大の自由を謳歌しているのだろう。小金をため込んでみたり、小さな気晴らしを試みたり、もしくは収入に見合った住まいをローンで購入し、たまに好みの服を買い、ついでに外食をしたりと、それぞれの身の丈に合った（言い換えるなら飼いられた）自由の余地は確実にあるのだが、他方、人間本性に関わる一大事における決定権——いわば本質的な「自由」は、実のところ常に不自由な状態に置かれている、そのことこそが問題なのである。周りの流れを読みながら賢く流されるという程度には賢明である一方、その賢明さは空気を読まずに波風を立て、背後に渦を作るような愚直さをまるで幼児の振る舞いであるかのように切り捨てる。

例えば原子力発電に頼る産業・経済体制から脱却すべきと考え、それを表明したところで多数決原理主義の「民主主義」は応えてくれるのだろうか。答えは悲観的にならざるを得ない。国政選挙の投票率が五〇パーセン

ト台に低迷し、例えば集团的自衛権の行使の容認といった重要な問題の賛否において「どちらともいえない」と「回答なし」が五〇パーセント前後を占める我々が片肺飛行の多数決社会では、いつの間にか自発的隷従の習慣が起動し、現状追認の「民意」が自動的に反映されるシステムを動かすことになるだろう。こうして、多数決は常に既存の支配機構の盾となつて機能する。多数決原理主義は、投票行動のみならず、我々の日々の言動が政府の政策を容認し、日々の経済活動が政府の景気対策を支持する仕組みとなっているのである。

我々が今、目の前にしているのは、一者支配の時代には夢の彼方の理想とされた多数決原理に基づく民主主義であるはずなのだが、その曖昧な輪郭は寝ぼけ眼をいくら擦つても明確な形を整えてくれない。誰が味方で誰が敵なのかもわからないから、闘う相手さえ見定めることができない。支配と被支配の関係が複雑怪奇に絡み合い、全体的なからくりがあまりに巧緻に組み上がっているため、支配——たぶん何者かによつて支配されているのは間違いないのだが——の鎖をどこでどう断ち切るべきか、その方策さえ見出し得ない。巨大な構築物の中にいながら、迷路の一角で虚しく佇むような〈閉塞感〉を一方で感じながら、他方では「サーカス」の悦びに身を委ね、相も変わらずラ・ボエシが指摘したように、せっせと隷従に精を出している——それは我々自身の姿であると同時に我々の鏡像としての日本という国の肖像なのである。そして直面しているのが、「彼らに到来した災厄は、嘆くに値しない。なぜなら彼らは、圧政者を追放し、圧政を抑えこむのだと叫びながら、その実王冠を排するのではなく、たんにそれを別の者の頭に載せることを望んでいたのだと、たやすく見てとれる」¹⁹、そんな自らが招いた茫漠とした不幸なのである。

三 人間は材料。働け、儲けろ、カネを使え

人口減少がこのまま進むと、あと三〇年も経てば日本の地方自治体の半数は消滅するという⁽²⁰⁾。一貫した人口減少の先に待ち受けているのは、文化的な深化といった側面を除けば、ありとあらゆる分野のありとあらゆる機構が縮小しなければならない社会である。これまでの「国の形」を転換せざるを得ない大問題ということでは、「日本再興戦略」と大袈裟に命名された成長戦略の改訂版素案が、二〇一四年六月、政府の手でまとめられた。先ず、「稼ぐ力」収益力の強化が自明の前提とされ、それを目指すことが日本にとって不可欠な命題となる。次いで、経済の流れを止めたり阻んだりする規制は、たとえ安全を見定めるために必要なブレーキであっても取っ払う。これが戦略なるものの骨子である。

さて、その目玉だが、次のようなものが挙げられている。農林水産業の成長産業化に向けた農業協同組合の改革や、農地利用の促進に向けた農業委員会制度の見直し。時間制労働を見直し創造的で生産性の高い労働を可能にするという新たな雇用制度。質の高い医療を受け易く、との謳い文句で診療の選択肢を拡げる保険内・外の混合診療。複数の介護・医療施設を運営し易くする新たなホールディング・カンパニー制度の創設。役所や企業における女性登用の義務化検討や配偶者控除の見直しといった潜在的な女性労働力の顕在化策。留学生の国内企業への就職拡大に向けた受入れ環境の整備や、技能実習生の在留期間の延長という外国人の活用策。カジノを合法化しての統合型リゾート施設やアジア諸国民へのビザ発給要件の緩和と出入国手続きの簡素化といった観光産業振

興策。ロボット開発などをバックアップする革命実現会議の設置。このほかにも、産業振興策として法人税減税やベンチャー企業の支援策、さらには公的年金における株運用比率の見直しなどの金融・年金分野における施策もある。

だが、諸手を上げて賛成を表明する声は少ない。混合医療の拡大といっても当の患者団体にも慎重論があるという。また、農地利用の促進を促すための農業委員会制度改革についても、目指すところが市街化調整区域の建設事業用地化へのハードルを低くすることであり、農業振興や自然保護との齟齬が懸念される。カジノの合法化・解禁というが、おなじみのパチンコと公営ギャンブル五種だけで年間二〇から三〇兆円を売り上げ、競馬などは世界の売り上げシェアの約三割を占める、⁽²¹⁾こんな国へさらに新型の賭博を広めようというのだ。現在でも四〇〇万人いるとされる賭博依存者の増加が心配される。⁽²²⁾

挙げ始めれば、それこそ限りなく問題点が炙り出されてゆくだろう。その実現性や実効性も疑問視されているが、素案の言わんとするところを大雑把に要約すれば、「働け、儲けろ、そして儲けたカネはパツと使え」となる。かつて「ジャパン・アズ・ナンバーワン」と呼ばれた幸福な日々の再来を夢みているのかもしれない。黄金時代の再興に対して障壁になりそうな規制を片っ端から緩めてカネ儲けの手伝いをしようというわけだ。だが、同じような規制緩和と自由競争の促進といった、ここ十数年ほど前の政策の帰結を思い出してみよう。ミニバブルの再来と崩壊があり、成果主義や非正規雇用の拡大にともなう労働状況の不安定化とともに、子供の貧困率が一六・三%と過去最悪になるほどに貧富差が拡大し、⁽²³⁾弱者層に貧困の固定化が進んだ。しかしながら、そうはいっても、過去の成功例の踏襲しか方法論を持たない人々が聞く耳を持つはずもない。あるいは政権の生産性を

喧伝しなければクビになるとでも思っているのだろうか。ともあれ、彼らの意図するところは、なりふり構わず、また手段さえも選ばず、ただ「カネ儲け」に徹することにある。そして、それを為政者の責任として誠実に果たすと、些か高揚した表情で昂然と言っているのである。

原理的に問おう。「儲ける」ことには財の移動がともなう。すなわち「より多く」儲けるとは、他者の財が向こう側からこちら側へ大挙して移転することを意味する。商行為が等価交換である以上、財の移動にともない、何らかの商品またはサービスが向こう側に動いてはいる。だが無論、真の等価交換は両替のようなもので、利益を生まない不毛なやり取りでしかない。だから「儲ける」ことを目指すならば、その交換を不等価に傾けなければならぬし、「より多く」儲けるためには、さらにその傾きを大きくしなければならない。つまり儲けるという行為には他者の權益を侵害する傾斜が含ま込まれているのである。ともあれ現代の市場経済では自由競争が原則であり、その原則に従えば誰にも機会は均等に開かれている——ということになっている。だから、自由に競争ができるように規制を外してあげれば、誰もが「より多く儲ける」ことができ、その結果、すべての人々が今よりさらに幸福になるというのだ。だが「原則」は現実と理想の間に齟齬が存在するから「原則」と謳われるのであり、均等であるはずの機会でさえ社会的な階層やポジションによって不等に割り振られており、つまり経済が現実である限り「均等」はあり得ない。そこに強奪とも搾取とも呼ばれるような過剰な不等価交換の傾斜が生み出されているのである。市場が限られたパイの争奪戦の場である以上、弱者も含めたすべての人々が自由競争によって幸福になるというのは原理的に誤謬であり、また幻想でもある。それゆえこの社会には、誤謬や幻想の直視を回避するため、商道德から始まり法的な規制に至るまで、財の分配に関するさまざまなレベルの規範が張

り巡らされているのである。

さてその商規範である。たぶん日本人の誰一人として、憲法九条を商行為の規範と見做してはいなかった。さすがに今回の「日本再興戦略」に記載されてはいないものの、その成長戦略は「死の商人」と呼ばれることも厭わず、なりふり構わず儲けるべしということになっている。二〇一四年四月、「防衛装備品移転三原則」が成立した。これにより武器を防衛装備と名付け輸出を移転と言い換えることで武器輸出が認められることになった。早速、フランスのバリ郊外で開幕したセキュリティ分野の国際見本市「ユーロサトリ二〇一四」に日本の防衛産業が初参加し、一三社が出展した。この見本市は、警察や防犯・防災といった民間防衛あるいは対テロのための装備品を扱う展示会という見方もあるが、陸上兵器の商業取引のための展示会であることには違いない。戦争放棄と平和主義を謳う国家が世界最大の陸上武器の見本市に堂々と出展し、商売を始めようとしている。そう、そこに巨利のチャンスがあるのに指を咥えて見ていることはない。いざ、儲けよ！

新規開拓の兵器市場に先駆け、原子力発電所の輸出は、すでに政府の熱心な営業活動が結実して、トルコやベトナム、さらにはインドと、原発プラントが続々と成約につながっている。福島第一原子力発電所の事故が、政治的にも技術的にも、また被災地の今後についても、まだ解決策が見えないこの段階での原発輸出である。地震や津波といった巨大災害に遭遇しても「あの程度にしか壊れませんから安心です。お安くしおきますから」とでも言ったのだらうか。まさに「死の商人」の節操のなさである——武器輸出や原発輸出に加え、カジノ賭博の寺銭で儲けようという魂胆なのだから。没義道忘我のカネへの執着と狂奔ぶりである。その昔、我々は世界中の人々から「エコノミック・アニマル」と揶揄されたことがあった。ここに来て、装いも新たに獣性もパワーアップし、

「エコノミック・ビースト」として再デビューを果たすのだ。

今や直接的な武力衝突は政治的交渉の失敗か交渉力欠如の証といわれ、代わりに経済制裁が国家間紛争の解決における常套手段となり、政治・外交における力の源泉が、武力の保持や行使から財の操作・運用へ移りつつある。他者の隷従を勝ち取る力は金銭にこそ宿るのである。財の操作法を獲得して初めて政治的な手腕を振るう資格を手に入れられるのだ。それゆえ、今回の政府は政権を掌握するなり、外為市場を操作して株価の吊り上げを真っ先に試み、景気に直結した「人氣」を高めると、やおら「喧嘩のできる国」に向けた手を矢継ぎ早に打ってきた。この点ではなかなか戦略的であった。

圧倒的な議席数を背景に高い支持率の獲得に成功したことで、何をしても反対勢力を蹴散らすことができる。そうした空氣が蔓延している。同じ空氣を吸った者たちの全能感が、閉鎖的な小集団の中では恍惚に至るまで濃縮される——近現代史における専制国家の誕生過程の見飽きた反復である。もはや卓越した人間など存在しない。にもかかわらず、数千万、あるいは億を超える国民の将来を握っているという使命感と表裏一体の強烈な自尊心と正義観に従い、世界を動かし、国民を導く「卓越した指導者」の理想像に自身を重ね合わせ、自らの国家観を無謬の原理として次々と「正しい政策」を打ち出してくる。

ところが、我々が指導者の打ち出した再興戦略の基本方針が、ありていに言えば「なりふり構わないカネ儲け」なのだ。何とも情けなくも悲しい話ではある。しかし、人びとがいくら慨嘆しようとも、為政者の決定は国民一人ひとりの権利の敷居を越えて、なお内側に踏み込んでくる。それが政治権力なのである。

もとよりカネ儲けという行為には理念など存在しない。それは生存に直結した欲求や恐怖に衝き動かされる生

き物たちの競争の写像である。もっと言えば、他者を襲撃し、喰らうことが運動原理となっている。自由主義の根幹に潜む「見えざる手」の本質は、「神の」という隠れたる主体が潜んでいることにあるのではなく、そんな不可視の主体など存在せず、誰もが（つまり神でさえ）必然的に「盲目」たらざるを得ない点にある。商行為の主体に見えるのは眼前にちらつく損得のみであり、その行為が影響を及ぼす全体に対しては誰もが等しく、また必然的に盲目たらざるを得ない。目先の利得に走る者は、それゆえ自分が究極において食う側にあるのか喰われる側にあるのかわからない。だから、人びとは行ないつつ、信任する——政治的な介入が人びとの欲得ずくの行為を敢えて妨げていないということ、当の行為を遂行することによって信任するというわけだ。こうして金儲けの祝杯をあげる者たちの宴席に指導者の全能感に溢れた陶酔の美酒が注がれると、彼らの閉鎖的な思考回路の働きにより、「国民」は統治されるべき総体として都合よく抽象化され、カネ儲けの客体の衣を纏わされてしまう。腹一杯に飲み食いしたと思ひ込んだ者たちは、用を足し、洗面所の鏡を見て突如、自分が喰われる側にあったと思ひ知らされる…。

「日本再興戦略」には、「労働」の生産性を上げるための施策が組み込まれている。潜在的な人材を顕在化し、活用すべく目を付けたのが外国人と女性である。そもそも人を「人材」と呼ぶこと自体に生者を資材化する（他者捨象）の可能性を孕んでいるが、それは措くとして、先ずは女性である。

企業や役所の幹部に女性を登用するため、自主的な行動計画の策定や登用目標設定および情報の開示を義務付ける法律を作るのだという。企業の取り組みを促進させる税優遇策も年内に検討して、二〇一五年の国会へ関連

法案の提出を目指すという。いわば雇用面でのジェンダー・フリーを図った「職制のあるべきユニバーサル・デザイン」であるが、内実は男性社員の仕事と地位の一部が女性へ移転されるだけである。なるほど職業において自己実現を目指す上昇志向の女性や、実際に性別ゆえの不遇に泣き寝入りする女性たちのモチベーションを上げるといった程度の効果は見込めるだろう。しかし、重用された女性たちの前向きな動機づけだけでは政府が目論む「収益力」の向上へ直接的につながるとは思えない。言うまでもないことだが、ごく限られた女性が新制度の恩恵を受けることになるとしても、それ以外の大多数の女性たちにはほとんど縁のない話だからである。

雇用機会均等法の施行以来、女性の職場進出は拡大してはいるものの、家事労働と職業労働の狭間で苦闘していることに変わりはない。パートタイマー、介護、清掃、あるいは内職に毛が生えたような製造業など、雇用環境が大企業や役所ほどには整っていない分野で細切れに時間を売って働くしかないのが、「潜在的」と見做された女性たち大多數の現状である。その上、景気後退時には給与削減や人員整理の対象となり、好景気になればなったで今度は微々たる残業代と引き換えに長時間労働を強いられる。加えて、好不況に拘らず雇用の非正規化への強い傾斜が残存している現況では、男女ともに苛烈な競争社会に投げ込まれているものの、荒んだ雇用環境でより生々しく影響を受けるのは元もと労働弱者であった女性たちであり、彼女たちが就くことを余儀なくされる「労働」の質はそれゆえますます悪化してゆくことになるだろう。

それでもなお、せっせと働いてもらおう——それが潜在的な資材である限りにおいて——。ということ、産休や育休の整備、保育所の拡充などの従来策に加え、放課後の児童を預かる学童クラブを充実させるのだと彼らは涼しげに言い放つ——あたかも女性に対する思いやりを籠めたかのような口振りで。しかし、実際に含意する

ものは口振りとは随分と異なる。すなわち、育児などという無駄なことに割いている「暇」があるなら、その空き時間を労働に充てろということだ。「時は金なり」の金言は今、剰余価値は時間の余剰を埋めるところから生まれると言ひ換えられなければならない。こうして生産性向上の観点から、働き手という〈用途〉の効率的活用を目指し、しみつたれていて甘くもない「アメ」をばら撒き、実際には馬車馬用の「ムチ」を思い切り振り回そうとしているのだ。

彼らの手にしているのが「ムチ」であることを証明するかのように、勤労者の所得税における配偶者控除の見直しが検討されている。勤労者家庭において専業主婦が圧倒的に多かった頃、「内助の功」の再生産性を評価すべく現在の配偶者控除が制度化された。主婦の年収が一〇三万円以下ならば、夫の所得から所得税では三八万円、住民税からは三三万円が控除されるというものである。この「一〇三万円」という上限額が同時に女性の働く時間の上限として機能しており、それがために彼女たちの働く意欲を削いでいるというのが尤もらしい口実だ。彼らは予測する——控除を適用する妻の年収額を大幅に引き下げることにより、女たちは「どうせ控除が受けられなくなるのなら、もっと働いて稼ごう」と考えるようになるだろう。

だが、考えてもみよう。配偶者控除の見直しは企業の賃金体系に変更を迫るわけではない。すなわち、まとまった時間も取れず、細切れの短時間労働ゆえ低単価に抑えられた賃金体系では、年収一〇三万円を稼ぐこと自体、なかなか容易ではないのだ。忙しい家事の隙間をすべて単純労働で埋め、やっと稼いだこの一〇三万円も、月額にすれば八万五千円程度である。その僅かな収入を子供の塾の費用に充てたり、将来の学資として積み立てたり、さらには家族の細やかな楽しみのために使ったりと、そんな人が少なくなる。たぶん彼女たち自身、もっと稼ぎ

たいと思つてゐるだろう。しかしそうは思つても働く時間をそもそも捻出できないのである。(官吏や政治家たちが眉間に皺を寄せて勘繰るように)、彼女たちは税金を納めたくないという動機があつて敢えて小賢く立ち回つてゐるのではないし、あり余る余暇を無為に過ごしながらその上で就労時間を調整してゐるというのでもない。だから、控除がなければ働く動機が高まるとかいう、そんな低次元の心理分析に基づいた作戦が成功するとは思えない。縦しんばこの実質増税で思い腰を上げて働き始める人がいたとしても、あたかも藪の中のキツネやタスキを煙で燻り出すような策をもつて高々と国家の「再興戦略」と謳い上げるのは、あまりにも輕薄で節操がなさ過ぎるのではあるまいか。

労働に対する報酬の多寡は、質によつて単価は異なるものの、基本的にその労働に費やした時間の量によつて測定される。工業製品であれサービスであれ、生産行為の成果が金銭と交換され、得られた額から生産コストを差し引いたものがその企業の粗利益となる。資本主義の大原則に従えば、より多くの利益を出しながら資本を回転し続けること、つまり、ひたすら拡大再生産してゆくことこそ企業にとって唯一無二の存在意義とされる。それゆえ、企業は一方では限りなく売価を高めることに励み、他方では製造コストの削減を目指す。独占や価格カルテルに抵触することなく思い通りの価格で販売できる企業は減多になく、競争に勝とうとすれば、目先の利益が減ろうとも売価を下げることになる。それでも同じ利益を確保しようとすればコスト削減を余儀なくされるだろう。機械と頭脳の革新的いし刷新を除けば、利益の拡大あるいは現状維持のためのコスト削減は労働量の効率的削減を意味する——単位作業量に対する時間短縮だ。生産時間の削減は企業の原理的運動則であり、そこには常に労働強化の危うさが存在する。この関係式の下では就業者の権利保護の観点からすれば、なおさら賃金は時

間と切り離し難くなっている。ところが、創造的で生産性の高い働き方を目指した雇用制度として、この労働における賃金と時間を切り離すことを「日本再興戦略」では提唱している。

これまでも、就労者自身が自分で勤務時間を選べる「裁量労働制」が存在した。就労者に業務遂行の方法や時間の管理を委ねた方が、より能力が発揮でき、成果が上げられるような職種、例えば弁護士、公認会計士、研究開発職、情報処理システム開発、プロデューサー、デザイナー、編集者などを対象とした「専門業務型裁量労働制」があり、また、事業の運営に関する調査・企画・立案・分析といった職種を対象とした「企画業務型裁量労働制」がある。これら以外にも、顧客を訪ね歩く営業職のような職種には「事業場外労働」として裁量労働制が認められている。

裁量労働制とは、実際の就労時間を測定することが困難であるため、それぞれの職種ごとに労使協定で定めた時間を労働したと「みなす」制度である。それを導入すれば、残業手当や深夜・休日手当を支払う必要がないと誤解する経営者も少なくないが、法定労働時間を超えたり、深夜・休日労働などがある場合には、労使間協定の「みなし」の如何にかかわらず労働基準法に規定された追加的給与を支払わなければならない。それゆえ、割増し賃金の休日や深夜を選んで働く者もある。また「みなし時間」は一定の部署の同種職種を対象として見積もられるため、実際に担当する就業者間の仕事の難易度や量のバラツキが、個々の業務遂行時間——すなわち賃金——のバラツキとなり、同じ職場にある就業者の間に不満が蓄積してゆく可能性がある。

裁量労働制を限定的にしか認めないのは、このような運用上の難しさに加え、不当雇用を防止する一方、就労者間の公平性も維持しなければならず、それには時間と賃金との関係を明確に定めて守る以外に方法はないとい

う考え方に基づいている。やはり時間と賃金とは切り離し得ない——雇用の質を維持しようとすれば、それらを切り離すことにいくに多くの問題が孕んでいるのかを考える必要がある。

二〇年ほど昔だったか、「フリーター」などと耳触りのよいネーミングで「好きな時に好きなだけ働く」ことが流行ったことがある。実際に多くの若人が非正規就労を先端的な生活スタイルであるかのように選択したものだ。その結果、中年の域に差し掛かろうというのに、これといった職業上のスキルを持たず、いつまで経っても学生アルバイトと同程度の収入しか得られないまま、貧困の淵へ沈んでいる人々がいる。取り分け労働に関して「自由」とか「柔軟」とかいう言葉が使われたときに最も危ないのだ。ニーチェを引くまでもなく、そんな時こそ大事な問いは「何が？」でも「いかにして」でもなく、「誰が」なのだ。つまり、鼻先にぶら下がる言葉が「自由」なら、「何が自由になりや」とか「いかに自由を謳歌すべきか」と問うのではなく、「誰が自由という美味しい看板を我々の眼前にぶら下げているのか」と問わなければならない。決まって雇用者側が有効に活用し、雇われる側がまたぞろ陥穽に嵌まるのをむざむざ眺める羽目になるだろう。ましてや景気の後退・停滞期にあつては、被雇用者側から見れば必ず「雇用が荒れる」のである。だから曖昧になりがちな成果評価ではなく、時間と賃金の関係式に基づいた給与体系をむしろセーフティ・ネットとして維持すべきなのである。

この度の戦略素案では、「柔軟な働き方」として「高収入型」と「労働時間上限要件型」の社員を時間規制の対象外とするとしている。年収一〇〇万円以上で高度な業務を遂行する社員を対象に、就労時間に関係なく成果のみで評価しようというのが「高収入型」である。他方、年収にこだわらず、介護や子育てに時間を取られ、柔軟な労働時間を望む女性などを対象として想定しているのが「労働時間上限要件型」である。いずれも労使の

機関同意と本人の同意を必要としているが、弱い立場の就労者側が成果主義を押しつけられ、残業代なしで長時間労働を強いられる可能性は見落とせない。そもそも時間・賃金制は生産性が低いという認識がないのなら、わざわざ時間と賃金を切り離して成果主義賃金制にする必要はないはずだ。言い換えるなら、同一成果を得るために時間か賃金かのいずれか、もしくは両方とも圧縮しようと企てられているのである。それゆえ、この制度の先行きに労働強化が待ち受けているのは明白である。

ブラック企業と呼ばれた大手居酒屋チェーンの社内文書に「三六五日二四時間死ぬまで働け」と創業オーナーの言葉が載っているという。まともな大人が本気で言うとは思え難い。少なくとも当人は従業員に発破を掛けるつもりで放った言葉なのだろう。しかし、言葉に貼り付いているのは発話者の意図ではなく、文の意味だ。そのことを裏付けるかのようにして、過酷な長時間労働と深夜勤務が原因とみられる女性従業員の自殺が起きてしまった。実際に三六五日二四時間働き続ける社員という、社内文書が言うところの「あるべき他者像」に沿って労働環境が固まってしまったのであろう。長期間に互い、休みなく働けば人は疲弊するし、上から命令されるがままに自分を殺して働き続ければ、次第に働く意味や目的も見失われるだろう。このような自明の理をなぜか集団的に都合よく忘れるという、程度の差こそあれどのような企業体でも見られる要素——実際にはその「程度」が決定的な要素なのだが——、そうした組織的な捨象の思考・運動則が企業という収益獲得を第一義とする組織体には存在する。そして、そうであるがゆえに、労働弱者を標的とした労働強化の可能性が拭えないのである。さて、ここまで時間と賃金をめぐって搾取の可能性が雇用制度に埋め込まれそうな話をしたが、次はさらに深刻な人権侵害を助長し兼ねない政策の話である。

東日本大震災からの被災地復興がなかなか上手く進んでいない。建設業をはじめとして現場で仕事をする人手が足りないのだ。そこへきて東京五輪の開催が決まり、いわゆる現場系の労働市場は供給が逼迫し始めていた。そうした中で、法務大臣の私的懇談会「出入国管理政策懇談会」の分科会が、現在最長三年間とされている「外国人技能実習制度」の受け入れ期間を五年まで延長し、また受け入れ業種をも拡大するよう求める報告書をまとめた。これもやはり件の「再興戦略」に盛り込まれている。

三年の研修で優秀な技能を取得すればさらに在留期間が延長できるのでそうだ。一応、技能検定二級以上程度をもって優秀とするようだが、その程度の技能レベルならば、仕事に対する関心と意欲が普通にあつて、一定の技能教育を受ければ、わざわざ日本になどやって来なくても故国で十分に習得が可能である。

日本の高度な技能の習得機会を提供することで、途上国の発展を支援するというのが制度創設時のお題目であつた。だが、そもそも我々日本人が「優秀な技能」と呼ぶものは、わずか数年で習得可能なのであろうか。

伝統工芸や手技・機械工作といった手業の世界をほんの僅かでも覗いてみれば、それが容易でないことは誰にでもわかる。例えば一〇〇〇分の数ミリメートルといったレベルで平滑度を見極める視覚や触覚、あるいは同レベルの異常を聴き洩らさない聴覚など、特異な身体感覚とその制御系である認識・思考とが一体になって初めて高度な技能と呼ばれるのである。その水準に達するには、当の職人に内面化された高い品質維持への厳格な価値観が不可欠である。また、その技能が職業として発揮される以上、その「質」を判定できる審査眼を有するともに相応の出費を厭わない顧客の存在も必要となる。さらには技能習得に要する長期間の修行や、「質」を維持するのに要する不断の努力にも敬意を払う社会的な環境も必要であるだろう。「モノづくりの日本」と称揚され

国際的な競争力の源泉とされる高度技能には、単なる器用な手技とは異なり、身体的な反芻と本人が所属する社会的・文化的なバックグラウンドが必須なのである。そうした技能について、まさか数年で取得可能などと本気で考えているはずがあるまい。いかにも甘い認識の裏に透かし見えるのは、慢性的な人手不足に對し、即効的解消策を求める場当たりの思考である。親切な表情に潜む動機が明白であるゆえに、注意が必要なのだ——技術の何たるかを解さない浅知恵に則って動けば、結局は高度技能の文化的な価値を貶めることになろうし、延いては生産の源泉を枯渇させ、却って高度な技能の普及・展開を阻害することになる。

たしかに生産年齢人口は将来的にも限りなく減少してゆくだろうし、日本社会の生産力の減衰過程が進行してゆくことはほぼ確実である。就職氷河期とか言われて久しく、事務系仕事や技術系仕事——所謂ホワイトカラー職種——には求職者が殺到する一方、現場系の仕事は圧倒的に人手が足りない。ほとんどの仕事現場で行われる建築業界では、就職希望者が皆無であるため、現場員が確保できずに解散に至る会社も見られるようになり、事態はいよいよ深刻な段階に立ち至っている。例えば、コンクリート型枠の大工を全く手配できない現場があり、昨今はその状況を見越して、計画段階では鉄筋コンクリート構造であったものを着工間近で鉄骨造に変更することも実際に行われている。

建設現場や製造工場では、「技能」と呼ばれながらも実際には限りなく単純労働に近い仕事がある。そもそも技能なるものは身体の運用面からみると単純労働とほぼ同じであり、現場はその技能とも単純労働とも判別し難い仕事で成立している。問題はその担い手が不足している点にある。そこで外国人を技能の担い手としてではなく、むしろ単純労働の手数として投入しようというのである。決して途上国へ高度技能を移転し、彼らの将来的

な幸福に貢献しようとして、わざわざ制度を設けたわけではない。単に背に腹を代えられないだけだ。とはいえ、無制限に外国人労働者が入ってくるのは脅威であり、それゆえ数的な移入制限を厳格に設定しながら、露骨にそうは言わずに体裁を整えておく必要がある。こうした事情の着地点が名づけて「外国人技能実習制度」であり、その本音が労働力不足への対応にあることを示しているのが在留期間の五年への延長である。さて、それでは何を実習して故国へ帰ってもらおうというのか。

日本政府の真意がどこにあるとも、現場系の仕事における日本式の職人的な技能や高度な現場管理技術を学ぶことは外国人にとつても役に立つ。とりわけ国の発展に向けて農林水産業や建設、工業生産といった現場系の仕事が増える途上国では、技能・技術の習得は確かに有意義であろう。だからラオス、カンボジア、ミャンマーなどの若人たちは、日本での技術習得と高収入を夢見て来日する。ところが受入れ企業側には、そうした途上国の若者に技能・技術を教えたとしても、「すずめの涙」程度の助成金を除けば、彼らの故国における企業のイメージアップ効果くらいしかメリットはない。経済合理性が唯一の駆動原理である企業が、その程度で複雑な手続きや身元保証をしてまで生産活動に直接的な効果が見込めない教育を引き受けるわけではない。

慢性的な人手不足を国内的に解消できれば、面倒に手を染める必要はさらさらない。しかし、日本の若人たちは「3K」と呼ばれる職種に関心を払おうともしない。それゆえ現場系の労賃は高騰する傾向にある。人集めも重要だが、人件費を抑えることも大切である。企業にしてみれば低賃金で働かせる方が都合だが、日本の若者たちは法的にも手厚く保護され、しかも日本語と日本的な諸事情とともに解するため、企業側が小賢しく振舞おうにも限界がある。もしブラック企業のような問題が出てくれば大騒ぎをして一大事となるのは必至であ

る。ブラックの烙印を押されるような不祥事は、企業にとって七面倒臭いだけでなく、致命的な打撃となりかねない。それに加え、日本の若者は総じて扱いが面倒である上に気に沿わなければすぐに転職してしまう。そこへいくと開発途上国の若者は自国での収入を上回れば大いに喜び勇んで働いてくれる。

「外国人技能実習制度」の受け入れ職種には次のような分野がリストアップされている——どれも担い手が極端に減少し人集めが緊急課題となっている職種だ。畑作・野菜作りや養豚などの農業、カツオ一本釣りからホタテガイ・マガキ養殖作業まで九種類の作業が対象の漁業、井戸掘りから始まり建築における大半の現場作業を網羅した建設、缶詰巻締めや水産品と食肉の加工作業を主にした食品製造、紡績機械の操作や縫製が中心の繊維・衣服、鑄造から機械加工・電気配線まで含めた工場労働二七作業を対象とした機械・金属、塗装や溶接に印刷・製本を加えたその他職種。これら全七分野、六八職種、一二九の作業が、これまで対象となっていた。そこに新たに林業、総菜製造、介護、自動車整備、店舗運営管理などを加え、製造業ばかりでなくサービス業にまで範囲を拡大して、年限延長と併せて外国人就労の総量を拡大して行こうというのである。

繰り返すが、低賃金と人数確保を同時に実現するには途上国からの労働力の輸入が手っ取り早く、また、労働移民の弊害阻止には年限と資格要件が厳密な「外国人技能研修制度」が最適なのである。それは何にも増して経済合理性に立脚した制度であるから、やがて問題が起きるのはわかっていた。むしろ引き起こされた問題から、制度・施策の本質が浮かび上がると言うべきか。例えば、二〇〇六年にはトヨタの下請け企業のうち、なんと二三社に外国人研修生に対する最低賃金法違反があった。この手の低賃金労働による搾取が最も目立つのだが、東京都内の縫製工場で働く中国人女性は、月額基本給が六万五千円であり、残業代は時給四〇〇円だったという。

土日も休めず、隙間風が吹き込む劣悪な工場の二階に寮をあてがわれ、月額五万円弱の家賃を徴収されていた。またミャンマー人実習生の例では、辛うじて合法の範囲だったが、最低賃金レベルの給与では家賃や水道光熱費を差し引くと手取りが月額八万円ほどでしかなく、そこから帰国のための旅費も積み立てなければならず、生活は容易どころではないはずだ。

体力（労働力）を維持するだけでなく、労働者を育て上げるのに必要な費用が労働力の生産費であり、肉体的生存だけが期待されるような産業分野においては、働き手の労働の価格は最低限の必要生活手段の価格によって決定される。このようにマルクスが一五〇年以上前に言い、「搾取」を見出したイギリスの惨状が、そのまま現代日本に再現されている——「彼の生産に必要な生産費は、ほとんどただ、彼の労働可能な生活を維持するために必要な商品だけに限られる」⁽²⁴⁾。

その他にも思いつく限りの搾取・侵害・剥奪が行われている。身元保証を盾に取り、勝手な移動を防止するという口実の下、パスポートを取り上げて軟禁同然の身柄拘束状態で就労させていた例もある。現地の送り出し機関への仲介料や雇用先が支払った保証金や違約金を借金のカタとして身柄拘束なども行われている。時間外労働の無理強いや強制的な貯金制度といった直接的に賃金に関わる権利侵害もみられた。制度認定以外の職種への就労はもちろん、不当な侵害や搾取に対する権利主張には強制帰国を命じることもあったという。さらには破廉恥にも、クビ即強制帰国などの脅し文句を使って性行為を迫るような陰湿な暴力もあった⁽²⁵⁾。加えて労働災害も見落とせない。二〇一二年度中には九九四人の実習生が死傷し、四人が死亡している⁽²⁶⁾。作業環境に対する不慣れが原因とも考えられるが、やはり仕事自体にも危険が存在していた。彼らの就労環境は、搾取・侵害・剥奪に危険が

加わり、高度な技能を獲得して高収入といった能天気な夢物語を描けるほど安穩ではなく、苛酷を極めるのである。そんな状況に投げ入れられ、脱出もかなわないとすれば、もはや現代における奴隷労働と言っても何ら差し支えないだろう。

他者に対する剝奪や権利の侵害は、そこに力関係があれば多かれ少なかれ必ず生じる。我々は誰しも他者を都合良く利用しながら生きてゆく。しかし、それが組織的に行なわれ、国家の規模で行なわれた場合に、どれだけ悲惨な出来事に発展するのか、いちいち詳細に歴史を振り返るまでもないだろう。一国の「稼ぐ力」を強化するために、他国の人間に夢を見させて招き寄せ、来たら身ぐるみ剥いで過酷な労働環境に投げ込む。「モノ作りの日本」といった外国人たちの尊敬や日本人の自尊心の拠りどころになっている文化が、札束で頬を叩くような搾取や剝奪によって毀損されようとしているのである。成長戦略の一環として、高度技能の研修で途上国の発展を支援するという美辞麗句の下で人身売買を促進していると言っても構わない。他者の苦痛を踏み台にして、なりふり構わず儲けようとしていることを我々は「恥」の文化を有する者として恥じ入らなければなるまい。

これまで日本の企業は、低賃金労働力を求めて生産拠点を海外に移転したり、途上国への外注を増やしたりしてきた。いわゆる低開発地域の「開発 exploitation」であるが、現地に雇用機会を生み出すと同時に技能の習得もご当地なりに修正された方法が採用され、しかも搾取や剝奪などの不良行為は現地側による監視が可能であり、それゆえ奴隷制と見紛うような搾取や剝奪は生まれ難かった。ところが、さらなる低開発地域を国内の窪地に拵えるという本音をちらつかせた制度では、生身の身柄を国境という有刺鉄線のこちら側に取り押さえ、追い剥ぎ紛いに身ぐるみを剥ぐと、カネに目の眩んだ剥き出しの獣性の前に労働弱者を裸のまま投げ込むのである。

そもそも経済的な先進国と途上国ということ、両者の勢力関係は固定している。その上に出稼ぎ者だ。母国においても裕福な身の上でないことは明白であり、雇用における弱者としての位置も確定している。「後進国」の本国ばかりでなく日本の保護からも切り離された「出稼ぎ」である以上、多少雑に扱われたところで不平を言い立てることもない。こんな認識だから同一職種の日本人労働者の三分の一程度しか給与を払わず、しかも未払い賃金の問題も生まれていた。そんなところに持つてきて、今度は能力測定を行ない、在留資格を判定するといふのだ。しかし、どうだろうか、この、いかにも見下した視線は。弱者の能力を強者の立場から判定すること自体、すでに差別の土台となる可能性を含み持つており、おのずと研修者は従属的な姿勢のまま硬直せざるを得ない。彼らはこのようにして二重にも三重にも搾取・剝奪され易い状況に放り込まれているのである。

政府が現実的な問題の解決機関である以上、高邁な理念だのを恭しく掲げて国民に行く先を示す以前に、先ず腹を空かした者たちにパンを配給しなければならない。品位の問題を別にすれば、身も蓋もない景気対策やなりふり構わぬカネ儲け策を打ち出したりと、施策が多少は対症療法的ないし場当たり的になることはやむを得ないことかもしれない。だが、彼らが扱っているのは、人の生存にかかわる「労働」である。生物の生存は時間と切り離し得ないのだが、その時間で量的に測定される「労働力」を市場原理に委ね、カネとの交換に付す関係を「雇用」と呼び、複雑多岐にわたる生身の人間の生存を懸けた行為を時間から切り離し、あたかも「生命ある道具」(アリストテレス)の如く交換可能な単用途商品へと抽象化してしまう。

人間行為の対象・目標に特定の価値が前提される場合、それを獲得する蓋然性・可能性の効率的な上昇の度合いを「有用性」という。例えば、儲けることを最優先に据える社会では、「いかに効率良く稼ぐのか」という有

有用性に従って人間の価値が測定される。さらに言えば、その有用性でもって人間性も再定義され、人の価値が決定されることになる。この価値観の下で、他者の有用性を最も効率よく獲得しようとすれば、究極的には「奴隷制」に帰結する。

「労働者と資本家との階級利害は融和しない」というのがマルクスの主張の大前提だった。しかし、彼の時代とは異なり、どいつが搾取する資本の側にあつて、誰が搾取される労働者の側にあるのが次第に曖昧になり、中産階級の肥大化とともに「階級闘争」という言葉が死語と化していった。しかも、やおら「勝ち組」だの「モテ系」だの、さまざまな地位が矢継ぎ早に繰り出され、転々と入れ替わるような現代日本にあつて、先の外国人技能研修生のような例を除けば、前世紀を思わせる支配・被支配の関係は見え難くなつていた。そんな中で成長戦略との美名の下に勤労者を時間から切り離すことで、苛酷な就労環境に縛りつけるような仕組み——言ってみればソフトな人身売買と奴隷制——を法的に許容・保証し、二一世紀の世に産み落とそうとしているのだ。なんたる傲慢さだろうか。カネ儲けにおける実用性でしか人間を評価できない成果主義の到達点が、現行の経済システムにおける成長戦略の必然的な「解」であるとするならば、我々は鼻先にぶら下がる「成長」という名の人参を追いかけるような生き方を是として今後も維持してゆくのだろうか。

四 ミミズと毒ガス

経済的な成長神話には進化論のアナロジーが貼り付いているが、実のところ生物の進化と経済成長は単なる類

推の域を出ず、それ自体は何の関係もない。

ダーウィンは、熾烈な論争からも進化論の社会的応用の道からも背を向け、晩年は専ら大地をのんびり耕す原始的な生き物に視線を注いでいた。名著、『ミミズと土』によれば、ミミズが一年間に作る肥沃な土の層は平均して〇・二二インチ（六ミリメートル弱）になるといふ。⁽²⁷⁾ダーウィンが大量の白亜（石灰）を撒いた土地を三〇年の時を隔てて調べてみると、肥沃な土の層は七インチ（一七センチ強）もの厚さに育っていた。⁽²⁸⁾

ミミズの生産性は緩やかだ。強迫的な経済成長神話とは無縁の、呆れるほど緩慢な速度ではあるけれども、しかし確実に土壌を甦らせてゆく。

子ども向けの『ダーウィンのミミズの研究』という本の中で、まじめでやさしそうな新妻先生は突如、思い立つ――「一年に六ミリ、三〇年で一七〇センチなら、一五〇年後の今ではその五倍で八五〇センチ！

ダーウィンが一八四二年二月二〇日に牧草地にまいた白亜の破片は、いまは一メートル近くの深さにまでしずんでいるのでは？ 自分の目でたしかめてみたい！」⁽²⁹⁾こう問い掛けると、新妻先生は一念発起し、ダーウィンの暮らしていたロンドンに出かけて行った。肝心の場所がどこかわからなかった先生は周辺の土壌を片っ端から調べてみたそうだ。すると、どこの土壌を測っても、やはり肥沃な土の層は一七センチ程度に留まっていた。

あれ、どうして？

いくつか推測することはできる。ミミズはぶよぶよの柔らかい生き物だ。堅牢な機械ではない。もしも彼らが機械的に年毎に七ミリメートルずつ土壌を改良し、次第に地殻の深みに掘り進んでゆくとしたら、数百万年の間にどれほどの深みに達するであろうか。おそらく、ミミズの身体の構造ではとても生命を支えきれない圧力と温

度の世界で暮らすことになるだろう。また、どんなに深く掘り進んだところで、地表から遠ざかるだけだから、彼らは食料の供給を絶たれるだけで、代わりに得られるものがない。つまり地底を目指す動機がそもそも彼らにはないことになる。

ならば、いたずらに深く掘り進むのではなく、反対に年に六ミリずつ地表に肥沃な土を積み上げているのだとしたら、どうだろう。ダーウィンはミミズの体内を通った「糞塊」がミミズの巣穴の付近にあるのを見つけて、とても緻密なデッサンを描いている。彼の推論はミミズの体内を通過し、「糞塊」という形で転生することにより土は肥沃になり、柔らかな土壌が厚みを増してゆくというものだった。とはいえ、ミミズが「糞塊」を積み上げるためには、彼らの食生活を支える動物性ないし植物性の物資がどこから供給されなければならない。必要な食料が余所から供給されないとすれば、彼らが生活を営むその場所から供給されなければならない。すなわち、せっかく肥沃になった土壌を植物たちが全く利用しないで、ひたすらミミズが耕し続けるだけの土地を考えることには実のところ意味がない。なぜなら、植物が生えず、植物を食む動物もいなくなれば、そこには生がないだけでなく、死もなく、それゆえミミズやバクテリアの生命を維持するための食料供給源もないことを意味するからである。

だから、ダーウィンの三〇年という期間は、一七センチという一成果を生むのに要した時間ではなく、すでに一七センチという到達点に至った後の年月も含めた時間であろう。ダーウィンの観察から新妻先生が思い立つまでの時間は一五〇年だったが、すでに一七センチという最高到達点に至っていれば、結果は変わらない。

しかし、これは推測である。尤もらしい推論であるが、借り物のロジックである。なぜなら、ミミズの生命活

動の時間に関して、ダーウインが抱いた問題に新妻先生の疑問が重なることで得られた仮説でしかないからである。答えを得ることは確かに大事なことだが、本当に大事なものは、答えを出すことではなく、問いを得ることだ。問題とは航海であり、散策である。疑問を抱き、問いかけることこそが答えに至る航路や行路を作り出し、しかも副次的に脇道や迂回路を幾つも産み落とす。だから新妻先生は我々のように矢継ぎ早に推論を立てて騒ぎ立てるのではなく、孤独な「わからない」の眩きから出発する。「ミミズは地表から十数センチのところにまでしかすんでいなくて、それより深いところの土は何年たってもミミズの体の中を通ることがないのだろうか？ そうならば、肥沃土はミミズのいる深さまでしかできない。／でも、ほんとうにそうなのだろうか。／もつともつと、掘ってみたい。／もつともつと、しらべてみたい」³⁰。

そう、問題は期限内に解を導くためのきっかけなどではなく、大切に抱き、育てるべきものなのだ。実際、どんな問いについても、解を得られるまでに要する時間の幅がある。問題を解くのに掛かる時間は、作業時間のことを意味するだけではない。物理学ならば計測する人間の時間だけでなく、計測される物質の振動数など極微の時間や時空の歪みを含む長大な幅の時代まで想定しておかなければならない。古生物学者であれば、炭素やウラニウムを用いた放射性崩壊の時間を想定するだろうし、ミミズの仕事を土壤の観察で確かめようと決意したダーウインならば、何世代ものミミズの生活が土壤に明白な表現として刻印されるのに要する時間を俟たなければならない。

七インチ。その解を得るのにダーウインは三〇年を要した。一つの人生という観点から見ると、なかなか長大な時間だ。一七センチ（＝七インチ）。新妻先生の疑問は一五〇年という、ダーウインとその後の何世代かの

時間を経て、新たな謎をとまって明らかにされた。その数値は、幾世代かの生と死が刻まれた時間の堆積物の上に小さく灯っている真理の灯火である。

しかし、自然は生と死を抽象的な時間に還元することを許さないだろう。生まれ、食い、排泄し、減びるといふ、そのプロセスすべてが生々しく、残酷であり、汚らしい。生き物は排泄し、朽ち果て、腐敗する。しかし自然は種々の掃除屋にも事欠かない。寿命の尽きた動物がどこかにあれば数キロ先から無数のハエがご馳走の匂いを嗅ぎつけ、飛んでくる。彼らは死骸の表面に群がるだけではない。液化した死骸をしゃぶるそばから卵を産みつける。孵った幼虫は腹ぺこの状態だ。彼らは死骸の内部に浸入し、成長し、やがて生殖活動に励む。こうして死骸の内外で世代交代を繰り返す、ついには腐肉を貪り尽くす。

一匹の動物の死骸はハエにとって、我々にとっての大地やその恵みと同じであり、もっと言えば彼ら一族の栄枯盛衰を物語る歴史が刻まれる小宇宙と言ってもよい。

目を脇に向けてみれば、ゾウやキリンが立ち止まり、大きな糞を落とす。その光景をどこで見ていたのか、巨大動物が事を終え、立ち去るや否や、スカラベやらフンコロガシなどと呼ばれる甲虫類がどこからともなく現われ、我先にと糞を丸めて巣に持ち帰る。働き者になると一日に運び込む糞の量が体重の数百倍にもなるという。また、誰もがその存在は感知しているものの、名前も種も知らない生き物が、大地の改良には欠かせない。公園で遊んだり、芝生でくつろいでいると、小さな生き物が弧を描いて草むらを舞う場面に出くわす。点が放物線を描くような飛躍の仕方です、思わず「どんな脚力をしているのか」と感嘆してしまうが、文字通り「トビムシ」という名をもつ彼らもまた、有機物の分解過程には欠かすことのできない存在だ。

動物が死んだり、排泄したりすることがそのまま虫たちの旺盛な生命活動に連結し、大地の再生を支えている。我々の排泄は腸内細菌の活動の賜物であり、おそらくトビムシの体内で落ち葉を腐葉土に変換しているのも無数のバクテリアにちがいないだろう。我々は彼らの有為転変や栄枯盛衰を通して、大地を巡る生命の悠久の歴史に思いを馳せることもできる。

しかし、もう少し生々しい観点からダーウィンの三〇年について再考してみよう。新妻先生の一五〇年後の問いかけから明らかにしたのは、ミミズが一七センチの肥沃な土壌を作るのに要する時間がそのまま三〇年ではなかったということである。もしも一平方メートルあたり一三・三匹のミミズが機械的に年に六ミリないし七ミリの土壌を甦らせるのだとすれば、単純な計算により六ミリの場合は二八年と四カ月、七ミリの場合は二四年と四カ月で目標値である一七センチが達成される——もちろんミミズには目標もなければノルマもないに決まっているのだが……⁽³¹⁾。

問題はここからだ。

現代の研究者にとつて、このような研究、すなわち少なくとも二〇年以上、確実さと正確さを期すなら三〇年弱の年月を経ない限り、結果が得られないような研究計画を立てることができだろうか。たぶん不可能である。ダーウィンの時間や新妻先生の時間は完全に過去の遺物に成り果てた。長くて白い髭を撫でながら、パイプの煙を眺め、悠久の時間に思いを馳せることを許された時代は、もはやない。一見する限り悠長で呑気な研究に耽っているだけのように見える時代こそ、実は手帳の日付や時計の時間に追われることなく、真の問題に向き合うことができたのだが……。

現代の研究者にとって、研究計画は、企業の収支決算をモデルにしている。あたかもカネ勘定こそ人間の本質とばかりに、収支決算のサイクルを時間の本質と見做し、研究成果もまた今期の売り上げのように機械的に出てくると考えられているのだろう。

この点において、ダーウィンのミミズの研究がいかに自然および生命の有為転変について真実を告げようとも、現代の研究倫理からすれば時間の浪費であり、まったくの無駄と言われることになるだろう。人間の自然認識にどれほど資するところがあつたとしても、その悠長な時間の使い方からしてミミズの研究は実学の名に値しないのだ。

ならば、役に立つとは、いったいどういうことなのか？ また真の実学、ありうべき実学の姿とはどのようなものなのだろう。

せっかくなので肥沃な土壌の観点から離れないようにしよう。

人は生き物たちの活動に介入し、バイパスやショートカットを作り、人間の生活に役立ててきた。農業という形で大地に傷を付け、土壌を痛めつけるのも人間的介入の一手法である。たぶん多くの人は、ミミズがいったい何をしていて、肥沃な大地とは何を意味するのかをほとんど知らなかった。しかし動物の死骸や排泄物が堆肥となつて大地に吸収されると土壌が肥沃になることだけは漠然とわかつていた。繰り返すが、排泄物や死骸に含まれる何が大地に回帰し、どうやって往年の勢いを取り戻させるのかは長らく不明だった。

虫やバクテリアの力を借りてリサイクルされているものは、いったい何なのか？ 植物が大地から吸収し、動物が植物から吸収し、我々が野菜や肉から摂取したもののうち、いったい何と何が大地の再生に必要なのか？

人がその秘密に分け入るのは、飢餓という宿命を目前に控えたときだった。

一八九八年、ウィリアム・クルックス卿が大勢の聴衆を前に語った内容はかなり衝撃的だった。彼は食料危機が間近に迫っていると警告したのだ。それは冗談でも誇張でもなく、一点の曇りもない真実だった。一九世紀末の世界は、たった一〇〇年の間に三倍に膨れ上がった人口を養うための手段を失いつつあったのだ。

一九世紀末の農業は、土壌が活力を取り戻す前に次の作物を収穫するよう迫られていた。農業従事者たちは次第に大地が痩せてゆくのを目の当たりにしながら、どうすることもできないでいた。それでも大国は増えすぎた国民の生命を維持しなければならぬから、競って海外から肥料を輸入した。ペルーの降雨量ゼロの地域に堆積した鳥の糞の化石、通称グアノ（鳥糞石）という途方もなく臭い物体があるのだが、それが高値で取り引きされ、激しい奪い合いが起きたほどである。当の鳥たちでさえ、五千年以上も排泄しまくった糞の堆積物がヒトによって、あんなにも重宝されるときが訪れようなどとは想像だにできなかっただろう。

グアノは言わば最強レベルの有機肥料だったが、それも尽きかけていた。自然な回復のリズムを待ってられないから、人は人為的に堆肥や家畜の糞を撒いて大地の復活を加速させようとしてきた。今や、その速度が最高レベルに達し、限界を越えようとしていた。

堆肥や家畜の糞などの有機肥料には難点もある。一つは生物による冗長かつ緩慢な分解の作業が十分になされない、有害な病原体が植物によって吸収され、人間に深刻な影響を及ぼすことがある。二つ目として、効き目があることは経験的にわかるものの、いったい有機物の何が自然に返り、大地に活力を与えるのかが不明なままだったのである。

だが現代では、化学肥料の主成分を見れば必要なものが何なのかがわかり、同時にクルックス卿が人類の救済という大仰な目的を掲げて、化学に何を期待していたのかもわかるだろう。トーマス・ヘイガーによれば、「店で買う肥料の袋に入っているのは、だいたい窒素、リン、カリウムという、三つの元素の混合物だ。この三つは植物にとって何よりも不可欠な栄養分である。現在、生産されているおもな作物はすべて、これらがないと生き残れない。これらは動物の糞や堆肥に含まれているが、量は少ない。昔から農民が糞や堆肥を友としてきた理由もそこにある。／ほとんどの作物にとって、いちばん重要なのは窒素である。窒素原子はすべての植物（そしてすべての動物）の、すべての細胞内に存在する、すべてのDNAとRNAに組み込まれているのだ。窒素がなければ生命は存在しない。この一つの原則の存在が、植物の生態系を限定する因子となる。つまり窒素がどのくらいあるかで、どのくらいの植物が育つかが決まるのだ」⁽²⁾。

周知のように、我々を取り巻く大気の八割は窒素である。気候変動の悪役にされている炭酸ガス（二酸化炭素）が「増えた、増えた」と言われながら、大気組成に占める割合はせいぜい〇・〇四パーセント弱といったところである。八割が窒素、二割が酸素と言って誰にも咎められない所以である。

クルックス卿の危機感の表明は、有り余る窒素を当時の科学者たちが総掛かりになってもどうにもできない点にあった。何が厄介だったのかと言うと、窒素分子（ N_2 ）の頑なさ、堅固さである。絆の強さと言ってもよい。その頑なさは希ガスに匹敵する。たとえば、ヘリウムやネオン、アルゴンなど希ガスのグループに属する元素は、他のどんな物質とも化合物を作らない孤高の物質である。彼らが孤独を貫く理由は、電子殻が満席になっていて、他の物質と新たに結びつく余地（空席）が残っていないからである。窒素の場合、原子番号は七であり、一〇番

のネオンから見れば、空席が三つほどあるはずだ。化合物は通常、互いの空席に手持ちの電子を与え合う形で作られるのだが、窒素分子が厄介なのはお互いの空席三つを相互に埋め合う形で堅く結合しているからである。それを一般に三重結合と言うが、これをやられてしまうと空席が全くなく、他の元素や化合物の入り込む余地がなくなる。分子状態になることで反応性が極端に低くなり、まるで希ガスのように素っ気なく振る舞うようになるのはこのためである。我々はそのお蔭で大気の八割を占める窒素をいくら吸っても健康に全く影響しない。ヘリウムを吸っても何ともないが、いきなり声が高くなるのはヘリウムが単に窒素や酸素よりも軽いからであり、それ以上の意味はない——言い換えれば、私たちの声の高さは個々人に固有の属性ではなく、窒素中心の大気と各人の声帯の振動パターンとの関係で決定される付帯的特性であることになる。

課題は、窒素分子の三重結合を解き、別の物質と結合させることにあった。何と化合させるべきか？　そして、誰が？　パトリック・コフィーは、人類を存亡に関わる難題に取り組み、見事に成功した人物について、次のような紹介から始めている。

「フリッツ・ハーバーは、世界で最も大きな経済的かつ社会的インパクトを与えた物理化学者である。「窒素の固定」という問題に対する彼の解——大気中の窒素〔 N_2 〕をアンモニア〔 NH_3 〕に転換すること——は、結果として中国やインドの飢餓を解決に導き、延いては一九〇〇年から今日に至るまでに世界の人口が四倍に膨れ上がるのを可能にした——その善し悪しは措くとしても——。第一次世界大戦のさなか、一九一八年にハーバーはノーベル化学賞を受賞したが、彼の栄冠に連合国側が苛立ちを隠さなかったのは、彼の開発し

た製法がドイツに肥料だけでなく、兵器の生産を可能にし、そのため戦争が四年も延び、その間に二千万の命が失われることになったからである。そして、ハーバーがドイツ軍の毒ガス開発を指揮していたことが知られるようになると、苛立ちは憤怒に変わり——彼は「化学戦争の父」として知られるようになった。⁽³³⁾

これだけ読んでも、フリッツ・ハーバーという人物は何やらいへんな偉業を成し遂げた人物である一方、なかなか屈託のある人生を送った人であることがわかる。その屈託は彼個人にのみ帰せられるものであるよりも、彼の人生が引き受けた時代の波であり、また社会や政治の目まぐるしい変化に翻弄された結果と考えるべきだろう。

今や高校教育を受けた者なら誰でも「ハーバー・ボッシュ法」の名を聞いたことがあるだろう。高温高压の反応室に純粋な窒素と水素をセットし、主に鉄を触媒にしてアンモニアを生成する方法である。

フリッツ・ハーバーのチームは、カイザー・ウィルヘルム研究所の一角で小さな反応炉を作り上げ、アンモニアの合成に成功した。その小さな機械をBASF社のカール・ボッシュが大量生産を可能にする大きさの設計に磨き上げ、人類救済の夢を現実のものにした。どちらの業績が偉大かはわからない。推測で言えるのは次のようなことだ。もしハーバーが成し遂げなくとも、いずれ誰かが同じ結果に辿り着いたはずだ。しかし、ボッシュの才能と執念がなかったなら、我々の社会は未だ実用的なレベルのハーバー・ボッシュ法にまで到達していなかったかもしれない。

二〇世紀初頭の人類は、一〇〇年の間に三倍に増えた人口、すなわち一五億人を養わねばならぬ焦燥感でいっ

ばいだった。彼らの仕事を抜きにした世界の有り様を想像するだけで我々の背筋には冷たいものが走る。たぶんハーバー・ボッシュ法がなければ、間もなく人口は半減していたことだろう。

二〇世紀後半になっても、ハーバー・ボッシュ法を持たない時代の中国は、政治体制の如何によってではなく、人口増加の波に対処する術がなかったために減じる寸前にあった。なるほど、文化大革命が掲げた農業政策の惨めな失敗のため、亡くなった人口は三〇〇〇万を超えと言われる。だが、政策を転換して、過去の農法に回帰したところで一時しのぎにしかならず、土地は痩せる一方だった。急速に忍び寄る人口爆発の運命は、クルツクス卿が危機感を表明した時代のヨーロッパと変わらないどころか、もっと始末が悪かった。

じり貧の中国を救ったのはアメリカとの国交正常化のおかげというより、アメリカがプレゼントした品物のお蔭だった——喉から手が出るほど欲しいけれど、当時の中国には製造できなかった機械——「一九七二年、リチャード・ニクソンの歴史的北京訪問後、最初に中国が注文したのは世界最大級、最新のハーバー・ボッシュ法による窒素生産工場だった。装置が運びこまれ、工場が建設された。それを操作するよう労働者が訓練され、二、三年がたつころには以前の二倍以上の肥料が流通するようになった。農作物生産量は急増した」⁽³⁴⁾。

ご想像の通り、二一世紀の現在、ハーバー・ボッシュ法により世界で最も多くのアンモニアを製造している国家は中国である。一〇億を超える人口を養っているのは、共産党の景気対策のお蔭ではなく、いわんや慈悲深いアメリカ資本主義のお蔭でもなく、今は亡き化学者と技術者たちの執念の結晶のお蔭である。中国だけではない。もしもハーバー・ボッシュ法がなければ地球の大地は痩せてゆくに任せるほかになく、現在の人口を養うことなど到底できなかった。その点において現在の人類の四分の三——あるいはそれ以上——は、ハーバーの発明と

ボツシュの冷徹な情熱によって何とか飢餓を免れ、辛うじて命を救われていると言わなければならない。

とはいえ、右に引いた文章から明らかなように、ハーバーの業績は人類の救済にとどまらない。すなわち、家庭を省みずに仕事に励んだ彼の情熱は、化学肥料の生産にのみ注がれたのではなく、もう一方で毒ガス兵器の開発にも注がれ、その点に彼の躊躇いはなかった。一人の人間が関わった技術であるにもかかわらず、一方の技術が数十億の人間を救い、他方の技術は数千万人の命を奪うことになった。このことは、はたして矛盾を意味するのだろうか。いや、恐らくは矛盾どころの話ではない。

私たちはすでに窒素の二つの顔を知っている。一つは三重結合によって結びついた気高い窒素分子(N_2)だ。二つ目はハーバー・ボツシュ法により三重結合を解かれ、水素と結びついて生成されたアンモニア(NH_3)である。そして、三つ目の顔である。アンモニアの製造に成功すれば、そこから爆薬の原料である硝酸(HNO_3 、nitric acid)を作るのは容易なことだ。英語で窒素を nitrogen と表記し、窒素を含むニトロ基(NO_2)と結合して作られる化合物に、ニトログリセリン($C_3H_5N_3O_9$)やトリニトロトルエン($C_7H_5N_3O_6$)、ピクリン酸($C_6H_3N_3O_7$)など爆薬に使われるものが多いのも周知の事実だろう。ハーバー・ボツシュ法は極端な高温高压状態で窒素分子を分解するが、不安定になった窒素原子はそれだけ大きなエネルギーを抱え込んで解き放たれたことになる。爆発反応は離縁した窒素原子がかつての連れ合いと再会し、よりを戻して窒素分子に戻る際、抱え込んだエネルギーを一挙に放出する現象である。肥料と爆弾の間には類似性だけでなく興味深い循環もあるというわけだ。

窒素を豊富に含むがゆえに硝酸が肥料として使われていたのと同様、今度はアンモニアから硝酸を作り、爆薬に転用することだって簡単にできる。となれば、アンモニアの大量生産が可能なボツシュの工場は、戦時におい

ではそのまま兵器工場として転用可能であつたことになる。平時に肥料を生産し、民衆のお腹を満たしていた工場が戦時になると敵兵を効率よく殺傷する兵器の製造に動員されたわけだ。

毒と薬が表裏一体であるのと同様、肥料と爆薬も表裏一体であり、物質に二つないし三つの顔があるのと同様、人が働く組織にも平時と戦時とで全く異なる表情があることがわかる。

そして、フリッツ・ハーバーにおいて二つの顔は相反するように見えながら、その実、徹頭徹尾一つの相貌に収束していた。ハーバーはユダヤ教からキリスト教に改宗しているのだが、それは思想信条の問題ではなく、キャリア形成の一環であり、さらに言えば祖国の規範に順応してゆく試みにほかならなかつた。彼の祖国愛——国家に対する無条件の忠誠心と尽力の姿勢——はときに異様と目に映るほどだったが、それは祖国なき民に生まれた者が帰属集団を捨ててまでして、能動的に手に入れた「祖国」だつたからではあるまいか。始めから——あたかも自然にそうであつたような——「国民」ではなく、新たに「国民」の一員として勘定してもらへるようになった者が必死に掻き抱いているか細い絆の向こう側にあるものこそ「祖国」にほかならなかつた。

だから、どれほど汚名に塗れようとその後悔はなかつた……？　ならば、彼だけ？　いや、戦争に関わつた化学者は彼だけではない。

化学戦にかかわつた科学者たちは、技術的な軍事問題——敵を殺傷しようとするか、さもなければ祖国の兵士を守ろうとすること——を解決するのは自分たちだと信じていた。その際、彼らは、より優れた電球の問題や、アンモニアの合成に際して用いたのと同じ理屈を適用した。彼らの方法論は、社会が平時から戦時

に移っても変わらなかったし、それは動機づけについても同様だった——その点は強欲さ、野心、そして個人的なライバル意識にすでに明白であつたし、主に変化したことといえば、科学的な理解への欲望が愛国心に取って代わられたことくらいだ。：「中略」：塩素〔分子〕の結合が一度でも解けてしまうと、そこから生じる塩素原子自体は途轍もなく反応性を増し、他の物質のほぼすべてから電子を引き剥がそうとする。塩素が体内に浸入し、無防備なヒトの組織に触れると、またたく間に反応が始まり、曝露が長引いたり、もしくは濃度が高くなったりすると皮膚や眼が焼けてしまう。塩素を吸い込むと肺水腫を起こし、肺の中が体液でいっぱいになってしまう。塩素の毒性に効く解毒剤はない。曝露が限度を越さなければ身体は自然に治癒するが、深刻なレベルになると犠牲者は自身の体液に溺れ死んでしまう。ある兵士がその様子を次のように語っていた、「そいつは肺に洪水を引き起こすんだ、——乾いた大地の上にいるってのに、水に溺れて死にまうのと同じなんだぜ。そいつの効果はだな、——頭が割れそうな頭痛とひどい喉の渇きだ（でも水を飲んだら一巻の終わりだ）、肺の中をナイフの切っ先で刺されたような痛み、次いで咳き込むと胃や肺の中から緑色の泡が噴き出してくる、最後には無感覚になり死んじまって終わりさ。肌の色は白から緑色がかつた黒を経て、黄色になり、その色が体の表面に広がっていくにつれ、眼球は冷やかな色合いを帯びてゆく。あんなふうには死ぬってのは、まさしく悪魔的な死にざまだよ。」

ハーバーは塩素の使用に関する助言者の一人だった。塩素にはいくつかの利点があつたのだ。通常は、工業用の化学薬品としてシリンダー内で利用するが、それは塩素の毒性がきわめて強いからであり、おまけに大気よりも重く、それゆえ塹壕の中にまで沈んでゆく。ハーバーは最初に放たれた塩素が雲のようになって

フランス軍の前線に迫ってゆくのを眺めていた。死を免れたアルジェリア兵は恐怖に駆られて逃走した。もしも誰かが雲から逃れようとしてもさらに追いかけてくるから、実際、目が眩み、行き場を失った兵士たちは、ドイツ軍のマシンガンにとつて、塩素の雲のスクリーンに浮かぶ標的さならだつた。ガスが十分に消散すると、ドイツ兵（防毒マスクは装着せず、濡らした布地で口を覆っているだけ）は、フランス軍が放棄した場所まで四マイル（約六・四キロメートル）の距離をためらいがちに前進した。ドイツ軍はほとんどフランス軍と同じくらい毒ガス攻撃に驚愕し、再集結地点に立ちすくんでいた。残された後半生において、ハーバーは、あのとときドイツは戦争に勝つ機会を失したとの主張を何度となく繰り返すことになるだろう。もしも将軍が彼の言葉に耳を傾けさえしてくれたなら、また武力で前進する用意が整つてさえすれば、きっと連合軍の前線を突破し、和平交渉を迫ることができたと、そう彼は信じていたのだ。⁽³⁵⁾

塩素ガスは史上で初めて実戦で利用された毒ガス兵器である。さして困難をともしない方法でできる単純な物質であるため、風呂場で「混ぜるな危険」の警告を読まずに混ぜるとすぐに第一次大戦の「雲」が発生して、極東の專業主婦が一〇〇年前のアルジェリア兵と同じ危険に身を曝すことになる。

単体の塩素は猛毒だが、我々の生命維持に不可欠な物質でもある。ナトリウムやカリウム、マグネシウムなど、これまた単体で扱うと危険な爆発物が塩素と結合し、塩化物を作ると、これらがいわゆる「塩」の成分になる。塩化ナトリウムであれ塩化カリウムであれ、鍋で煮ようがフライパンで焼こうがびくともせず、食べると塩辛く感じるだけである。火で炙ったり他の調味料と混ぜるくらいでは化合物が離縁して料理人に肺水腫を引き起こし

たり、不意に爆発したりといった惨事になりはしない。

いわゆる「塩」が化合物として安定しているということは、結合を溶かれた途端、猛獣が解き放たれるということも暗に意味している。猛り狂う塩素は吸い込んだ途端に肺組織を破壊し、ナトリウムは水に触れた途端に火花を散らす。

塩素ガスの製造はアンモニアの製造を一手に引き受けたBASF社の得意技の一種だった。つまり塩化ナトリウムを分解し、苛性ソーダ（水酸化ナトリウム）を製造する際に副産物として大量に生み出されるからである。食塩水を温め、スパゲッティの代わりに電極を差し込めば次の単純な反応が起こるという寸法だ。



ハーバーのみならず、多くの科学者が戦争協力に躊躇しなかったのは、単に科学者同士の真理をめぐる争いが国家同士の争いに転換されたに過ぎないと感じられたためかもしれない。競争心と敵愾心を仕事に向かう動機にしている人びとにとって、成果は研究であれ戦争であれ一緒であり、勝てば嬉しく、誇らしいという程度の単純なものだったのだろう。しかも、ハーバーにとっては、アンモニアの生成に劣らず、毒ガス兵器の使用も有益と目に映ったはずだ。「有益」であるからこそ実学の核心にある述語であり、となれば、生かすか殺すかの違いはあれど、いずれの技術も実学の核心にあるものである——一方は化学肥料の開発により人類に貢献し、他方は殺戮兵器の発明により祖国に貢献したのだから。

人類に貢献した技術について、彼が発見せずとも、遅かれ早かれ誰かが発見したとすることはできるだろう。しかし、同じ台詞は毒ガス兵器についても言うことができる。大事なのは彼が二つの技術のいずれにも関わってしたこと、つまり彼の名が科学技術の両面を見事な形で表わしている点にある。そして、そのハーバーが戦時に放ったと伝えられる正当化の台詞は、問題の根幹を集約している点において、今なお重要さを一グラムも失っていない。彼はこう言ったのだ——「毒ガスを使って戦争を早く終わらせることは、多くの人命を救うことにつながる」⁽³⁶⁾。読者は「毒ガス」という語彙を「原子爆弾」に入れ換えれば、アメリカ人の多くが原爆使用の言い訳として使う台詞の雛形になっていることに気づかれたはずだ。まさか、ハーバーのノーベル賞受賞を非難した国々から数十年を隔てて同じ台詞が出てくるとは、非難した当の人々でさえ予想しなかったろう。しかしながら実のところ、ある種の言説には毒ガス兵器に匹敵する汎用性があるのである。すなわち、その使用によって戦争の終結を早め、多くの人命を救うことになるという表現さえ採用しておけば、どんなに残酷な兵器でも——殺傷能力の高い兵器ほど皮肉にも——使用可能になるということだ。このような非物理的な支えがあるからこそ、いつの世でも軍事関連の費用があらゆる研究開発の中でも際立って多額の資金を吸収することができるというわけである。

とはいえ、ハーバーには失うものも多かった。

イープルでの塩素攻撃の一週間後、ハーバーは一時、前線を離れて自宅に戻った。一九一五年五月一日から二日にかけての夜中、「妻の」クララは夫の軍用拳銃を手にすると庭に出ていき、自分に向けて引き金を

引いた。息子のヘルマンは銃声を耳にして、間もなく母のなきがらを発見した。⁽³⁷⁾

クララ・ハーバーは独身時代、つまりハーバーと結婚するまではフリッツと同様、化学の研究を志していた。フランスのピエールとマリーのキュリー夫妻のように二人で共同研究の道をゆく選択肢もあったかもしれないが、フリッツの頭にその種の選択肢はなかったらしく、クララは彼が求める妻の役割にその身を押し込めて暮らすしかなかった。彼女にとって、一度は志した化学が大勢の人間を殺戮するための邪悪な道具として使われることは我慢ならなかったに違いない。生憎、クララとフリッツがその夜、何を話し合ったかはわからないし、彼女が夫に送った書簡も多くが失われていて、その真意を確認することはできない。しかし、その確認したい真意を伺わせる資料が何も残っていないことが却って、この夫婦の不和の原因を雄弁に物語っているように感じられてならない。

妻の抗議の自殺を目の当たりにしながらも、フリッツは翌朝、再び前線に出向いて行った。彼はそれまでと同様にして「我が家」よりも「祖国」を選び、妻を哀悼することよりも祖国に尽くすことの方を選んだのである。

しかし、第一次大戦後、ワイマール体制のドイツが世界恐慌に吞み込まれると情勢が次第に怪しくなる。ハーバーの愛した祖国の頂点にはユダヤ人を激しく憎悪し、知識人や権威を無闇に毛嫌いする男が就いた。忘れてならないのは、ナチスは武力ではなく選挙を通じて政権党になったという事実であり、ヒトラーの総統就任も民意により——それも国民投票において九割に近い賛成票を得て——実現したということだ。

ヒトラーの政權獲得当時、イタリアに滞在していたカイザー・ウイルヘルム協会総裁のマックス・ブランクはこの事態を憂慮し、帰国するとすぐにヒトラーに会い、ハーバーが最大限にアンモニア合成で貢献したことをあげて、一人一人のユダヤ人を区別すべきだと意見をのべた。だが知識人に対して激しい敵意を秘めるこの独裁者は、平然と答えたという。

「それは正しくない。ユダヤ人はユダヤ人である。彼らはいがのように寄り集まってくる。一人でもユダヤ人がいれば、ただちにほかのあらゆる種類のユダヤ人が集まってくる」

その「あらゆる種類のユダヤ人」と変わることなく扱われ、ハーバーの辞職願は受理された。⁽³⁸⁾

祖国を愛し、汚名に塗れても母国に尽くした男は、こうして愛する国から拒絶され、ゴミのように捨てられた。ただでさえ病弱だったハーバーは、氣落ちした状態でドイツ国外を放浪することになる。一年の間にスイスからイギリスに渡り、イングランドの冬の湿気に体力を削り取られ、瀕死の状態でスイスに舞い戻った頃、ハーバーはもはや脱け殻のようになっていた。彼が息を引き取ったのはヒトラーが政權を掌握してから一年足らずの頃だった。

アルベルト・アインシュタインは同じユダヤ人でありながら、フリッツ・ハーバーとは正反対の人物のように感じられる。実際、根っからの平和主義者であり、祖国愛のかけらもなかったアインシュタインは実学的な関心についても皆無であり、深遠な思索に耽るタイプの研究者であり、それゆえハーバーの戦争への関与についても

ただ愚かしいと思っていられない。ハーバーの祖国に寄せる想いに共感を寄せた様子も見られない。にもかかわらず、アインシュタインが彼を個人として軽蔑した形跡はなく、彼らは生涯に互ってお互いに対する信頼を崩すことのない親友でもあったようだ。

ハーバーの生涯は我々に対して、「役に立つ」ということの複雑性と多義性を身をもって示してくれた。有用であることの素晴らしさと哀しさ、祖国を愛し、祖国に重用されることの誇らしさと恐ろしさ、悲しさ、そして有益であらんとして日々の仕事に励む人間のけなげさに潜む根源的な虚しさと酷さについても雄弁に語ってくれているようにみえる。

ならば、そもそも「祖国などクソ喰らえ」とうそぶき、虚学の権化として燦然と輝くアインシュタインはハーバーが嘔み締めた虚しさから無縁だったのだろうか。我々が思い描く気高い研究者の肖像は、形而上学者のそれに似て些か浮世離れしているイメージがある。利他的な有用性といった形而下の榮譽にしがみつく者たちの卑近な浅ましさに軽蔑を隠さない者たち、それが伝統的な数学者や理論物理学者だった。しかし、孤高の天才も、いつしか若い才能から相手にもされない単なる老い耄れになり、科学者というよりもアカデミズムのスーパースターとしてジャーナリズムを賑わせるだけの存在になっていたのではないだろうか。また彼の名声と同じく、彼の孤独な思索の結晶ですら、次第に主の手を離れ、思索の中身とは別の次元で応用され、そこそこ便利なツールとして色々な用途に使われるようになっていった。おそらくアインシュタイン自身ですら、特殊相対性理論の中心をなす公式に卑近な実用性があるなど想像すらしなかったろう。しかしその公式、すなわち「 $E=mc^2$ 」なくして核分裂の発見はなかった。ウラニウムやプルトニウムの原子核が砕け、そこに含まれる僅かな質量が純粋なエ

ネルギーに変換されたことを正確に表現する公式、それこそ彼が提唱した理論の核心にある「 $E=mc^2$ 」にほかならなかった。

一九四五年の夏、広島と長崎に投下された核兵器の中心部で起きた反応を表現する公式も「 $E=mc^2$ 」であり、被害の規模から爆弾に使われたウランとプルトニウムのうち、どれだけの物質が消し飛び、巨大な爆発力に変わったのがその公式によって算定される。この宇宙から完全に消滅した物質の量が「 m 」であり、その「 m 」に光速の二乗、すなわち「 c^2 」を掛けると爆発の威力を意味する「 E 」になるという寸法だ。

もちろんアインシュタインはアメリカに亡命していたものの、原爆製造プロジェクトにほかならぬマンハッタン計画に関与してはいない。レオ・シラードがしたためた手紙に署名することでマンハッタン計画を準備したとは言えるかもしれないが、計画そのものにはほとんど関与しなかった。しかしながら、彼の当時の身体や頭脳が作戦に関わっていないなくとも、以前に彼が発見した事実と、彼が創造した理論とがそのまま真つすぐに原爆の製造と投下に繋がっていたのである。

その点では純粹な虚学というのも夢想の産物でしかないのかもしれない。完全な不毛というのも、また一つの夢でしかない。

逆に——または同じ意味において、世紀のニセ論文として世間を賑わせた業績でさえも、全くの不毛というわけではない。人が噂し、世論を賑わせ、新聞や雑誌の売り上げが少しでも伸びたなら、不正論文でさえその程度には役立ったと言えるだろう。検証作業に駆り出された人びとには迷惑千万な話だったろうが、それでも仕事を増やし、人びとの汗と時間を奪った点において、それ相応の貢献をしている。

愚にもつかぬクズ論文でさえ、それを読んだ者の怒りや悲しみなど感情のさざ波を立てることができたなら、森林資源の浪費以上の何らかの仕事をしたと言えるだろう。

私たちには自分たちのしている仕事の何が役に立ち、何が役に立たないのか究極においてはわからない。私たちは自分の仕事のあらゆる有用性とその全射程については盲目たらざるを得ない。ひとは特定の価値や動機をもって行為するが、行為の全射程は宿命的に見えないのだ。その意味ではどんな偉大な業績であっても、「見える手」と同じく、余波を含む全容については盲目のままである。したがって、今を生きる限りにおいて、誰一人としてハーバーの選択を笑うことはおろか哀れむこともできないだろう。彼の愚かさ、くだらなさ、情けなさについては、すべてが我々の宿命的な愚かさでもあり、我々自身の救い難さでもあるのだ。

そう、私たちは自分が書いたものが迎える運命を知ることができない。この文章についても然り——普通に行けばせいぜい人畜無害な紙屑で終わるだろう。有害というほどに傑出した特徴でもって煙たがられるなら光栄の到りだが、恐らくは傑出した有用性を誇ることもなく、ほどほどに無駄な言葉の羅列として打ち捨てられる運命にある。尤も、何を予測したところで適度に阿呆な頭脳による当てずっぽうでしかないのは言うまでもない——。私たちは自分たちが書いた言葉の羅列が意に反して何かの役に立ってしまうのを妨げることではないし、自信満々で役立つと信じた一節が虚しく屑籠に捨て去られるのを悲しむことすらできない。人にはおのれの行為の結果とその余波の総体を予見する力が宿命的に欠けている。ありとあらゆる愚行の本質と源泉には、おそらく宿命としての無能力が関係している。その無能力とはアダム・スミスの洞察に関連しているだけでなく、ウィトゲンシュタインが洩らした一文、すなわち我々は何かを信じつつ同時にそれを疑うことができないという命題にも関

係している。我々は今、誰かの前で何かをしながら、相手の出方を予測し、得られた洞察をおのれの行為の修正に反映させることなどできないし、反映の結果として考えられる望ましくない効果のすべてを封じるべく前もって何らかの手だてを打つこともできないのである。

宿命的な無力を克服することは、どうやら永遠に不可能である。ならば、人はどうすればよいのか——そう、目先の損得に囚われるがいい。さもなければ、原理原則に忠実な官吏の行動様式を思い出せばよい。もしくは堂々巡りの地獄から脱する方法を延々と考えあぐねるべきだろうか？ しかし、もしも形而上学的な愚行の沼に嵌まるのを避けたいなら、困難からさつさと身を翻し、日常的に見られる愚行の沼にどっぷり身を浸すしかあるまい。間違っても、いつか賢明になれるなどと信ずるべきではない。きっとそれも間違いなのだから。

註

- (1) リチャード・フォーティ『乾燥標本収蔵1号室』渡辺政隆／野中香方子訳、NHK出版、二〇一一年。一二三頁。
- (2) 同、一二三頁。
- (3) 同、一七七―一七八頁。
- (4) 同、三七八頁。
- (5) 同、三七八―三八一頁。
- (6) 偉業を成し遂げた数学者はアンドリュー・ワイルズだが、目下の主題からすれば証明の内容よりも、彼が自分一人の手柄にしたことでエルデシュ・ナンバーで有名なポール・エルデシュから批判を受けたことに注意を払っておきたい。古代の賢者の趣すら漂わせるエルデシュが実際には共著論文を大量に生産し、それによって数学界を鼓舞していた点はいかにも時代の変化を物語る。現代科学の主流は、もはや孤独な思索ではなく、多額の資金を元手に遂行される共同作業に存するのであり、

さらに背後から成果主義の圧力が恒常的に掛かっている点に、多くの研究者に道を誤らせる要因がある。因みに道を誤ったという批判はエルデシュからワイルズに向けられたものであり、エルデシュ自身は成果主義の罠に嵌まることを嫌がったから夥しい量の仕事を独り占めすることなく共著論文として残すことができたのである。なお、ワイルズの偉業を概観するなら、以下が参考になる。アミール・D・アクゼル『天才数学者たちが挑んだ最大の難問』、吉永良正訳、早川書房、一九九九年。サイモン・シン『フェルマーの最終定理』青木薫訳、新潮社、二〇〇〇年。

- (7) 多くの専門家の予想に反し、ポアンカレ予想を解明したのはサンクトペテルブルクに暮らすグレゴリー・ペレリマンという無名の数学者だった。しかも、当の論文が掲載されたのは所謂「査読つき学会誌」ですらない。その点がフィールズ賞の受賞資格として問題になったほどだが、ペレルマンは結局受賞を拒否し、ミレニアム問題の懸賞金についても受け取りを固辞したという。これ以上の詳細は控えるが、ポアンカレ予想の証明を巡る騒動については、春日真人『NHKスペシャル 一〇〇年の難問はなぜ解けたのか——天才数学者の光と影』(NHK出版、二〇〇八年)で知ることができる。科学における栄誉と破滅の関係は表裏一体であるか、もしくは振じれているが同一面の彩りでしかないかもしれない——ポアンカレ予想に託つて言うわけではないが……。

- (8) ポケモンの場合、進化のその先に既知のカテゴリが控えているのに対し、ダーウィンの進化の帰結は、種にとっても個体にとっても完全かつ純粹に未知の可能性にとどまり、なおかつ未来の成否によっては進化ではなく、単なる事故ないし個別的な異例性に終わるかもしれない。

- (9) リーマン予想に関する一般向けの美しい紹介として、マーク・デュー・ソートイ『素数の音楽』(富永星訳、新潮文庫、二〇一三年)がある。練習問題を解きながら進みたい向きには、吉田武著『素数夜曲』(東海大学出版会、二〇一二年)を推薦しておく。予想の中核部分に聳えるゼータ函数はその姉妹ともども外観だけを見れば、非常に単純かつ美しい級数形式を取っているの、その中に潜む怪物の姿はなかなか伺い知れないだろう。

- (10) フォーティ、前掲書、四四三頁。

- (11) 同、二七八頁。同じく大病を患った研究者の例として、我々は桁外れの国文学者である松田修の存在を忘れることができない。事実上、教育や校務に全く携われない状態と知りながら彼を解雇せず、定年退職を迎えさせた法政大学に我々は敬意

を表したい。

- (12) エティエンヌ・ド・ラ・ボエシ『自発的隷従論』西谷修監修、山上浩嗣訳、ちくま学芸文庫、二〇一三年。五三一―五四頁。
- (13) 原研哉武蔵野美術大学教授、毎日新聞「発言」二〇一四年五月二九日朝刊。
- (14) JOC木村剛専務理事、五月二八日の発言。
- (15) 日本ホッケー協会の「JHAニュース」<http://www.hockey.or.jp/news/press/>
- (16) サム・キーン『スプーンと元素周期表』松井信彦訳、早川書房、二〇一一年。四二―八頁。
- (17) ラ・ボエシ、前掲書、三五頁。
- (18) NHK電話世論調査、二〇一四年六月六日から八日。
- (19) ラ・ボエシ、前掲書、四七頁。
- (20) 日本創成会議人口減少問題検討分科会（座長・増田寛也元総務相）。
- (21) 「日本中央競馬会・地方競馬全国協会について」農林水産省。
<http://www.gyokaku.go.jp/sanyo/dai4/41siryoul>
- (22) 精神科医帚木蓬生の推計。
- (23) 厚生労働省「国民生活基礎調査」二〇一三年、相対的貧困率。
- (24) カール・マルクス著『賃労働と資本』長谷部文雄訳、岩波文庫、第八〇刷、二〇〇六年。五五頁。
- (25) 『毎日新聞』二〇一四年六月一日朝刊。
- (26) 国際研修協力機構の報道機関への公表資料。
- (27) チャールズ・ダーウィン『ミミズと土』渡辺弘之訳、平凡社ライブラリー、一九九四年。一二四―一二七頁。
- (28) 同、一二九頁。
- (29) 新妻昭夫（文）／杉田比呂美（絵）『ダーウィンのミミズの研究』福音館書店、一九九六／二〇〇〇年。二九頁。
- (30) 表記の都合上、算用数字を漢数字に変え、子ども向けのルビを省略した。
同、三九頁。

- (31) 同、二〇頁。一平方メートルあたりのミミズの数は大衛・ウィーンでも新妻先生でもなく、「ドイツのある学者」が自分の庭を掘って調べたのだという。
- (32) トーマス・ヘイガー『大気を変える錬金術』渡会圭子訳、みすず書房、二〇一〇年、一五―一六頁。
- (33) Patrick Coffey, "Cathedral of Science", Oxford University Press, 2008, p.72.
括弧内の補足、例えば「フリッツ・」などは引用者による補足。
- (34) ヘイガー、前掲書、二八〇頁。
- (35) Coffey, pp.36-7.
- (36) 彼のものとされるこの言葉を彼がどういう場面で述べたのかについては、はっきりしない部分がある。出典は、宮田親平『毒ガス開発の父ハーバー』朝日選書、二〇〇七年。
- (37) Coffey, p.106.
- (38) 宮田、前掲書、二〇三―四頁。